

599  
234



0000060-000

599-234

不安世界の大通り

清沢洌・著

千倉書房

昭和6

AAB



512B27



清澤 洌 著

千倉書房 版



序

むかしは『洋行歸り』といふものが、新知識の別名であつたことがあつた。今は『洋行歸り』は時代遅れの代名詞である。

わたしは世界を旅行して、たゞ一つの知識を得た。それは日本が世界のどこよりも『新しい』ことである。新しいものゝダンピング市場が、日本であり、ことに東京である。わたしが世界の大通りを歩いてゐる頃、どこでも問題になつてゐるのは勞農ロシアのダンピングであつたが、日本ではそれが新しいものであるかぎり、ロシア・ブランドのダンピングは特に歓迎されて、需要は底なしの状態である。

一ヶ年近く『洋行』を終へて、東京の真中に立つた私は、ドン・キホーテが都見物に出たやうな気がした。なんと變つてゐることか。文字が新しい流行が新しい、思想が新しい。その文字も英、佛、獨ぐらゐるまでなら、辭書

てりよに者著じ同

米國の研究	(大正十四年十一月刊)
モダーン・ガール	(大正十五年十一月刊)
黒潮に聽く	(昭和三年四月刊)
自由日本を漁る	(昭和四年四月刊)
轉換期の日本	(昭和四年十月刊)
巨人を語る	(昭和五年一月刊)
アメリカを裸體にす	(昭和五年十二月刊)
不安世界の大通り	(昭和六年四月刊)
フオーード傳	(近刊)

を引いても、どうやら片もつかうが、ロシア語が出、イタリア語が出、世界の言葉が總出だからたまらない。そして新らしからんがためには、これ等をべら／＼と何時でも應用する實力を備へなければいけないのだ。

日本は今、新語辭典……それも一ヶ月前のものだ、もう時勢に適さない……をポケットに入れなければ、インテリ顔しては銀座も歩けない『新しい』世の中になつてゐる。榮養不足で青い顔をした青年達が、イデオロギーのウルトラのと、氣狂ひのやうに尖端を漁る様を見ろ。日本は何にむく國かは知らないが、少なくとも神經衰弱症にだけは毒な國である。

この著は『古い』世界が、どう東洋の巡禮客の眼に映じたかを『新しい』日本に紹介しようとする小さな企てである。たゞわたしが世界の大通りを駆け足のやうに通りぬけた頃は、世界はまだ今のやうな、不安な、重々しい空氣に／＼まれてはゐるなかつた。

そこには嵐の襲來を豫想せしめるやうな一抹の暗雲はあつた。腐りきつた土臺が永遠に五重の塔を支へることができないやうに、現在の文明を乗せかけるには、世界の土臺は餘りに迷信と、矛盾と、歴史に朽ちほうけてゐた。小さい小指で押すほどの壓力が、全體のバランスを失はせるであらうことは、世に先んずる者だけが知るのではなかつた。

二十年以前の世界には、闘ふべき『敵』の正體が明瞭であつた。ドイツは英佛を目がければよかつたし、日本はロシアやアメリカに備へればよかつた。しかし土臺のゆるみから來た世界は、今、會體の知れない怪物と闘つてゐる。世界を横行するその怪物が、マルキシズムだと簡單に決めてしまふのは、マルキストの自惚れと、例のドグマ癖からである。かれ等をもふくむ世界は、暗夜に泥田をかきまはすやうな盲目滅法さで、統一のない努力を續けてゐるといふべきであらう。それが現在の不安世界の特長だ。

が、前にいつたやうにわたしが、世界の大通りを駆けぬけた頃は、まだニューヨークのウォール街も、ロンドンのダウニング・ストリートも、表面そうした怪物に苦しめられてはゐなかつた。不安世界の大通りは、まだ自足の満足に浸つてゐた。大通りには赫々と陽が照つてゐた。

私は終りにロンドン會議批判の一篇を加へた。それは一つにはこの重大な會議を批判したものが、日本に著書としては殆んど一つも現はれてゐないからであるが、いま一つの理由はこの會議の始めから、私は對米比率七割を無用なりと主張し、今なほ悔ゆる所以を知らないからである。私はシアトルから日本全權一行と同行してロンドンに赴き、ロンドン會議はお膝許でこれを傍聴した。その頃、現場において書いたものが、こゝに收むるものであつて、私は特に一字の訂正を加ふることなくして讀者の批判を仰ぐことにした。

この書が店頭に現はれる頃、不思議な運命は私をまた米大陸に送らうとして

るる幸ひとするところはかくて、この國にをれば必らずかゝるであらうところの神経衰弱症から一時遠ざかることであるが、それと同時に私の大きな不幸は、かくて『新しい』日本から、ますます遠ざかるであらうことである。

著 者

# 不安世界の大通り 目次

## 序

### 第一篇 歐米をまたぐ

第一	アメリカと英國……………	三
1	三つのニューヨーク……………	三
2	一番遅い自動車……………	五
3	移りかほる女……………	八
4	紳士國の英國……………	一〇
5	マルクスの墓に詣つ……………	一三
6	ロンドン人の氣風……………	一七
7	自由主義の英國人……………	二〇

第二 飛行機で大陸へ……………一三

1 人間の目方……………二三

2 上から見たベルギー……………二五

3 オランダの風景……………二七

4 大陸の第一印象……………二九

第三 中央歐洲の卷……………三一

1 大陸の汽車旅行……………三三

2 失くなる英語……………三四

3 ベネツシュ氏と語る……………三六

4 深更のウインの町……………四〇

5 警察國イタリ……………四三

6 衛生に悪い信仰……………四五

第四 バリを捜る……………四九

1 パリの夜の街……………四九

2 客引きとチップ……………五一

3 ナポレオンと藝術……………五四

4 秀吉の朝鮮征伐……………五六

5 パリの調和美……………五八

6 悠長なるパリジャン……………五九

7 土のフランス……………六一

第五 歐洲踏査の實感……………六五

1 『日本人』の重荷……………六五

2 ホームを持つ人間……………六八

3 ロンドンの自由主義……………七〇

4 フランスの船……………七四

第二篇 世界人の印象

第一 マクドナルドと語る……………八一

1 野外服装のかれ……………八一

2 マルクスとロシア……………八三



3 尤もらしい宰相姿 ..... 八七

4 小山に立つて説明す ..... 九〇

5 國家主義を憤る ..... 九四

6 宗教家の調子あるかれ ..... 九七

7 淋しい家庭生活 ..... 一〇〇

**第二**  
ムツソリニ會見記 ..... 一〇五

1 駄々広い部屋にたゞ一人 ..... 一〇五

2 かれの成功觀 ..... 一〇七

3 イタリーだけの主義 ..... 一〇九

4 背が低く愛想がいゝ ..... 一一一

5 金草鞋をはく聖徒 ..... 一一四

6 人間か組織か ..... 一二六

**第三**  
フーヴァの顔 ..... 一二二

**第四**  
ハースト(ジャーナリズムの怪人) ..... 一二九

1 一人の力、戦争を供給す ..... 一三九

2 キュバ獨立の少女志士 ..... 一三一

3 監獄を破つて少女を救ふ ..... 一三四

4 米西戦争つひに爆發す ..... 一三七

5 『スエズで商船を沈めよ』 ..... 一三九

6 怪傑の生ひ立ち ..... 一四二

7 紐育に乗り出す ..... 一四五

8 新聞界の巨人を目がけて ..... 一四七

9 年俸二十五萬ドルの記者 ..... 一五〇

10 民主黨を助く ..... 一五二

11 大統領暗殺さる ..... 一五五

12 結婚から政治へ ..... 一五八

13 議員收賄を素破ぬく ..... 一六〇

14 二萬ドルで買った材料 ..... 一六一

15 日本と英國を攻撃す ..... 一六五

16 アル・スミスとの確執 ..... 一六八

17 アル・スミス頑張る……………二七〇

18 新聞王雑誌王となる……………二七二

19 現時のナポレオン……………二七四

第五 リンゼー(友愛結婚の元祖)……………二七六

1 友愛結婚殿らる……………二七六

2 『私刑にしろ』……………二七八

3 社会主義のため辯護士に……………二八〇

4 現はれた少年悪漢……………二八四

5 子供の信任を裏切らず……………二八六

6 少年の味方……………二八八

第六 スノウデン……………二九二

1 スックと立つ……………二九二

2 魂の活力……………二九四

3 相手の首に短刀……………二九七

4 危険に瀕したヘীগ會議……………三〇〇

第七 犯罪王カポネ……………三〇三

1 覆面の自動車……………三〇三

2 沈黙の壁……………三〇六

3 年収入六億圓……………三〇八

4 人気ある犯罪王……………三一一

5 殺人専門家……………三二三

6 シカゴの『浮動要塞』……………三二六

7 探偵局を襲撃……………三二九

8 殺人者の王國……………三三三

第三篇 各國諸相のクローズ・アツプ

第一 アメリカ女のスカート……………三三九

1 牧師と太股……………三三九

2 乳房のない女……………三三一

第二 女の國をのがる……………三三五

1	ナイヤガラを裏から	二三五
2	軍隊の星で苦勞	二三六
3	女とお茶の會	二三八
4	男は使はれる者	二三九
5	頭のがらぬ地頭と女	二四二
6	女なるが故に	二四四
第三	ロンドン印象記	二四七
第四	ベルリンの旅日記	二六二
第五	ボンペイの死都	二七五
第六	キツス祭り	二七九
<b>第四篇 樂屋から見たロンドン會議</b>		
第一	アメリカの若槻全權	二八五
1	財部全權の脱線	二八五
2	最初に出した『最後』の切札	二八八

3	若槻全權の戰術	二九一
4	缺けたる宣傳機關	二九四
5	理智の若槻、情の財部	二九七
6	親日的な米國の輿論	三〇〇
7	何故親日的になつた	三〇一
8	外交技師の時代去る	三〇四
第二	ロンドン會議の前景氣	三〇八
1	日米全權の交渉	三〇八
2	七割固守の意志なし	三一〇
3	淋しい英人の出迎へ	三一一
4	若槻とマクドナルド	三一五
5	能吏にすぎぬ若槻	三一七
6	佛國の立場	三二〇
7	包まれたる爆彈	三二三
8	樂觀されぬ會議の前途	三二七

9 一部は必らず譲らん……………三二九

**第三** ロンドン會議の開會式……………三三三

1 霧深きその朝……………三三三

2 英帝の開會のお言葉……………三三五

3 歴史的な會場の光景……………三三七

4 霧の日本と無霧の米國……………三三八

5 英首相の演説……………三四一

6 米國の首席全權……………三四四

7 猫背のブリアン……………三四六

8 晴れの舞臺の日本語……………三四八

**第四** 軍縮時代劇の展開……………三五一

1 慌てた米國全權……………三五一

2 日本と米國の交渉……………三五四

3 米國全權の驕引……………三五六

4 七割比率を排す……………三五八

5 日本の立場の矛盾……………三六二

6 太平洋協定の提唱……………三六四

7 日佛の共同動作……………三六八

8 『時代』を現はす會議……………三七一

**第五** ロンドン會議總まとめり……………三七五

1 日本輿論の敗北……………三五

2 輿論の跡始末……………三七七

3 外務系と海軍系……………三八一

4 若槻首席全權の決心……………三八三

5 英米の態度……………三八五

6 日米交渉の進行……………三八八

7 妥協案成立す……………三九〇

8 ロンドン會議の結論……………三九二

第一篇

歐米をまたぐ



# 第一

## アメリカと英國

### 1. 三つのニューヨーク

わたしはニューヨークのタイムス・スコエアの真中に立つてさう叫んだ。

大きな崖を切りさげたやうな建物の下を、斷髪のモガが通る、氣取つた奥様が通る、油ぎつたビジネス・マンが通る。自動車は横ぎる。そして皆なまるで飛んでゐるのだ。この一足が金何ドルに當るぞと云ひたげに。紐育には「飛ぶ」といふ文字があつて、「歩く」などといふ文字はないかも知れぬ。

わたしは二十年ばかり前に、同じ場所に立つた時のことを想ひ出してゐた。その頃も、こゝが賑やかであることに變りはなかつた。それはグン／＼伸びてゆく巨人の若い姿であつた。

が併し、その當時なくて現在あるものが、少なくとも三つある。一つは高い建物——スカイ。

スクラツパーで、第二は自動車で、第三はショート・スカーツだ。そして眼をふさいで、この三つを想像してみると、そこにアメリカが浮ぶのだ。

「アメリカに美術がない、とよく批評家はいひますね……」

私を前において、大銀行家のオット・カーン氏の言葉は寧ろ怒りに燃えてゐた。場處はウォール街における同氏の事務所、この邊から絲を引けば、世界の金融の網は、鱒をとる網のやうに一所に集まるであらう。

「アメリカには古い型の美術はありません、それは認めます。しかし貴方はあの摩天樓の大建築を大美術とはお考へになりませんか。大西洋の廣い洋をこえて、水晶のやうにニヨイ／＼と空中に聳え立つてゐる高層の建物を見る時に、人類が始めて創り出した美術を美しいとは思ひになりませんか」

アメリカ文明に對し、決して盲目的な迷信を有してゐないこの大實業家は、しかしアメリカの優れたるものに對して謙遜ではありえなかつた。

いかにもニュー・ヨークの摩天樓は、世界のどこを捜しても比類のない大美術である。舊い世界が、人間の像と、獸の頭とを彫つて、棚の上に並べて、「美術」と稱して居る時に、このアメリ

カでは土を掘つて、天に挑んで、大美術を得意の大量生産で地上に建設しつゝある。それは舊い美術の型には這入らないかも知れぬ。併しそれが新しい大美術でなくて何だ。

わたしはアメリカの大摩天樓の下に立つてこれを打ち仰ぎながら、そこに人類が、壓制な自然に對して、雄々しくも反逆してこれに打ち克つた姿を見たのだつた。

## 2 一番遅い自動車

「世の中で、一番早くて、併し一番遅いものはなんだ」

私は、かうした謎のやうなことを考へて、自分から心の中で笑つた。

スピードを代表するやうに考へられて、その癖最も遅いものはニュー・ヨークの自動車である。私は、時間を急ぐ時に、よく自動車にのつた。ところが、このタキシードは紐育では一番遅いものなのだ。私はタキシードにのつて——歩きさへすれば、疾くに到着できるところを、タキシードに乗つたばかりに、決して遅くなる自分を發見した。

ニュー・ヨークでは自動車は水落のところ集まる魚かなにかのやうにゴチャ／＼してゐる。それが電氣仕掛の自動信號を目標に、ゾロ／＼と走り出すのだ。三四町走つたと思ふと、また五

十分休まねばならぬ。

「自分でスピードの武器を發明しておきながら、そのスピードに裏切られて、却つて動きのとれない滑稽さを見ろ」

私は兎さんと龜さんの競走に、龜さんが勝つた話を想ひ出して、自動車が早いものであると信じ切つた自分の迷信を嘲つたりした。

しかしニュー・ヨーク人は、今、この障害にすら打ち勝たうとして居る、かれ等がハドソン河の底を掘つて河の底に十マイル以上のトンネルを完成し、そこを自動車を通つて居るのは餘程前のことである。「龜よ、龜よ、龜さんよ、世界の内にお前ほど、歩みのおそいもの」のない紐育の自動車を、兎のやうに早くするために、紐育の街を三階にして、一番上を歩道にし、その次ぎを自動車道にし、一番下を貨物の運搬に當てようとする計畫は現に進行中だと聞いてゐる。

スピードのアメリカが、世界を征服したといふ意味は、アメリカの自動車が世界に行き渡つたといふことだ。それでもまだこのアメリカのスピードに、効果のない抗議を繼續してゐるものがある。

古い帝國オーストリア・ハンガリーのジョセフ皇帝は、自動車には帝室に適當する威厳がない

といふので、一生それに乗らず、またタイプライターや電話を使はなかつた。自然の讚美者である英國の文豪ラスキンは、スピード文明が自然を毀つことを慨して、英國を馬車で旅行して汽車と自動車に抗議した。

が、それがどれだけ續かうか。昔アレキサンダー大帝が、印度を征服するために、東へ東へと進んで目的地に着くために、一ヶ年を費やした。それが今ではトルコのアンゴラから印度のカルカッタまで三日で飛べる。大シーザーが東のエジプト遠征からイタリーに歸るまで三ヶ月を要した。今では汽船は三日かゝらない。あのナポレオンが、ロシアに敗れてパリに、引きあげる時、駿馬をかつてワルソウから飛ばせて十日を必要とした。今では急行列車で三十六時間あれば充分である。東海道早飛脚で十日以上はかゝつたらう長い道が、今は飛行機で五時間もかゝりはしない。……

この世界のスピードを生むのに、どこよりも力のあつた紐育は、今から二十ヶ年以前に自動車の影は殆んどなかつた。スピードを代表する自動車は、それに應はしいスピードで僅かの間に地上に現はれて來たのだ。



## 3 移りかはる女

この自動車に、短い女のスカートを加へれば、アメリカの名物は見てもいい。二十五六年前までは、西洋の婦人服といへば、腰を蜂のやうに細くして、スカートは徳川時代の長袴のやうに長かつた。四五人で道を歩けば、人道は雑巾をかけたやうに綺麗になつた。今、ニュー・ヨークの街に立つてみる。女の服の變つたことはどうだ。スカートは膝こそに達しない。その下はスラリとした肉色の靴下でもよければ、まるで何にもはかずにアスバラガスのやうな脚をそのまま露出してゐてもいい。

脚の方がお軽くなつた婦人は……お尻もお軽くないと誰が保證しよう……手の方、首の方を見ると、これも露出状態だ。夏にでもなると、袖が腕に及ぶやうな衣物を着てゐるものは誰もありはしない。肩から下は全く白大根のやうに出してゐる。

「手を出して足を出して胸を出して人間の秘密がどこにある。女に秘密がなくなつたのだ。秘密の公開がアメリカ文明の特色だ」  
わたしは、紐育の女の群を眺めながら、移りかはる女のアメリカを珍らしくみた。

女を、かう薄着させておくためには、勢ひビルディングや家庭をあたゝかにしておかねばならぬ。アメリカの何處に行つても、冬寒いなどといふところはない。家の中が暖たい。電車や自動車の中があたゝかい。ビルディングは無論あたゝかい。

だからアメリカを旅行すれば分ることだが、アメリカ人で下着に毛のシャツなどを着てゐるものは全くありはしない。みんな日本の眞夏に着るシャツを着てゐる。

「アメリカで君、毛のシャツを洗濯に出すものではないよ。まるで着られなくしてしまつたんだ」

若槻全權一行がアメリカを通過してロンドンに渡る途中で、一人がかういひ出すと、  
「君もさうか、おれもだ」

と、みんなで話しあつて笑つた。大奮發で純毛の下着を買つて行つて、それを洗ひに出したのだが、洗濯屋が丸洗ひかなにしたために赤兒のオベ、のやうに、縮まつてしまつたのだ。

かうして部屋の中をカン／＼に温かにしておいて、喉が渴くと無暗に氷水ばかり呑むのだ。ドイツ人がビールを呑み、佛國人やイタリヤ人が葡萄酒を呑むやうに、アメリカ人は水ばかり呑む。

「歐羅巴に行つて御覧なさい、とてもこんな贅澤なことは出来やしませんよ。アメリカはまるで浪費ですネ」

わたしはそんなことを友達にいはれて、夜の十二時といふにホワイト・スター會社の巨船オリンピックで舊世界にむかつた。

#### 4 紳士國の英國

英國の船にのると、その日から直ぐ階級的であり、言葉が丁寧であることに気がついた。小さい言葉を一ついふにも、必ずその後にはサーといふ敬語をつけた。

それに彼等はよくサンキ・ユーといつた。

「水を一杯くれんか」

「イエス・サー・サンキ・ユー」

「この昇降機で五階に連れて行つて下さい」

「イエス・サー・サンキ・ユー」

「よろしうございます」がサンキ・ユーだ。電車の中で誰かの足を踏む。「どうもすみません」とい

ふと「サンキ・ユー」と来る。サンキ・ユーを「汝に謝す」と翻譯すると、足を踏まれた方から、「汝に謝す」奴があるかといひたくなるが、「どうしまして、何でもないことです。御丁寧に有難う」と解釋すると「なるほど英國人は紳士だネ」といふことにならう。

アメリカで押へ切れぬほどの活動力ある「成年の姿」を見た私は今、英國で由緒ある舊家の老成人を見るやうな気がした。どこに行つても思慮と分別には打つかつたが、併し米國に見るやうな生々たる活力はなかつた。

わたしがロンドンの郊外にカール・マルクスの墓を慰問したのは、ロンドンに到着してから二ヶ月ばかり後であつた。

私は日本に居つた時に、マルクスを商品に使つて餘り儲けたことはなかつた。自由主義と社會主義の間に、幽霊のやうに迷つて居る私は、マルクス信徒から見ると、資本主義の牙城に迫る前に、まづ血祭りにあげねばならぬ輩である。

だからロンドンに來たからとて、浮世の義理からいつて、私がマルクスの墓に詣でねばならぬ義理あひはない。併し日本にはマルクスで食つてゐる人が澤山ある。殊にわれ等と同様に筆を持つ者の間には、マルクスの墓の方には家内一同、足をむけて寝ることもしない連中が數へられな

い程ある。わが同胞の恩人は即ち日本人として私の恩人である。さういふ辨證法的論理をつくりあげて、私は一人で日曜にマルクスの墓詣りに出かけた。

「オヤツ！」

と思つた。隅の方に髯をモジヤ／＼生やして人骨柄がマルクスそのまゝの人が居るではないか。あの男を寫眞にして口繪に出したらマルクスを地下から起しても、あれ以上に似はしまい。日本に連れて行つたらマルクス・ポイイが偶像のやうに頭を下げるであらう。その頃はまだ電車はなかつたらうが、マルクスはあんな顔をして、毎日圖書館に通つて、大部な資本論を書きあげたのか……

「こゝが終點です」

私は隣りの人に、さう注意されて外に出た。電車のマルクス君は、もう人混みの中に這入りこんで見えなかつた。

「墓場に行くにはどれに乗るんですか」

行きあたりバツタリ主義の私は、マルクスの墓場に行くについても、詳しく聞いて來なかつた。

なにしろ世にも知れたマルクスの墓場だ。行けば直き分るぐらゐに考へてゐた。私は乗合自動車の車掌にさう聞いた。

「二つあるが一つの方ならこれにのつたら行けます」

わたしはそれに乗つて墓場の前に下りた。ロンドンの冬は毎日曇つてゐて、太陽存在の事實さへ忘れかけてゐるが、今日は珍らしく太陽が顔を出してゐた。

## 5 マルクスの墓に詣つ

「カール・マルクスの墓がこゝにあるさうですが……」

私は制服を着た門番にさう聞いた。門番といふものは英國では大概金筋の這入つた制服を着て胸のあたりに勳章——夜店で買ふものもある——をつけてゐるに決つてゐる。英國人は制服を好きな國民だ。

「カール・マルクス？ いつ頃死んだんですか。何だか聞いたこともあるやうだが」

この番人はマルクスを洋服屋の親父か、洋食屋の給仕長とでも心得てゐるらしい……あなたのその『制服』の世界を覆さうといふ恐ろしい企みの張本人とは御承知ないか。

「マルクスか、マルクスなら知つてゐるが、サア、こゝに墓がありますかどうか。中に這入つて番人に聞いて御覧なさい」

それでも上役と思はれる人が来てさういつた。

私は綺麗に整つた墓場の中を歩いたが一向分らない。マルクスの友人であるべきプロレタリアの労働者に聞いても、不埒なことにはその名すら知らないのだ。

「もしやカール・マルクスの墓を御存知ありませんか、社会主義の創造者、ドイツの哲學者、それからロンドンで死んだ……」

古い名だけいつて分りつこはないから、私はそれに幾つも註釋を加へることにして、さう來かゝつた紳士に聞いた。

「五十年ぐらゐ以前に死んだつて？ それぢやこの墓ぢやありませんぜ。これは新しい墓ですから。それならハイガイト・セミタリーでせう。一緒に行きますからいらつしやい」

ロンドン人はさういふ文字をアイと發音する。東京人がシとヒと間違へると同じだ。ガイト、Gait。がサイム、それからエキザミネーションがエキザミナイションと來る。

わたしが乗合自動車賃を出さうすると、自分で出して何といつても私に拂はせない。英國人は

ムツツリしてゐて、一寸取つつきが悪いが、交際ふと氣味の悪いほど親切だ。

ハイ・ゲイト墓場に行くと直ぐ分つた。

「カール・マルクスの墓にいらつしやるでせう」

と頭から門番が私の顔を見て聞くのだ。

「なぜ」

と此方が少しビツクリして聞き返すと、

「日本人の方が澤山いらつしやいますよ」

といふ。

「外の國の人も來るだらう」

「來ないわけではありませんが、その數でとても日本人には叶ひません」

なるほど、日本はマルクス多量生産の國——勞農ロシアを除く如何なる國よりも、マルクス信者の多いところではある。

幾つもの墓を通つて、私達は番人に連れられてマルクスの墓に行つた。

墓は隅の方の長屋のやうな貧弱な場處にあつた。周圍はジメ／＼してゐて、雨が降らないに拘

らず、土地が濕つてゐるところから考へれば、五十年の春秋はマルクスの肉は勿論、骨まで黒い土に歸せしめてゐるのであらう。墓は半坪にも足りないであらう、誰の寄附になるか、墓石はまだ新らしくて、平たい石にマルクス一家の名が刻んである。

ジェニー・フォン・ウエストフアレン

カール・マルクスの最愛の妻

歿出 生 一八八一年十二月十二日

カール・マルクス 歿出 生 一八八三年三月十四日

この外、孫のロングエツト、長く召へたヘレナ・デムスの名も書いてある。マルクスの夫人はマルクスより四年の年長で、夫より二年早く死んだのだ。マルクスの墓には誰が捧げたか、新しい花がさゝれてゐた。この附近で花輪のたえないのは

この墓だけだといふ。

「マルクスにはこの墓でいゝのだ。この裏長屋のやうな墓石でいゝのだ、かれの墓が大きな刻石で堂々たるものであつたら、かれの教へたところとどう調和するだらう」  
私のはかれの墓の前で、さう考へながら、世界の思想と社會に巨弾を投げかけた巨人の跡を、も一度考へた。

この世界の内で、人類の歴史に最も大きな影響を與へたもの三人をあげよといふならば、私はキリストとマルクスとエヂソンをあげねばならぬ。私自身が大マルクスの説いたことをそのまゝ信じないといふことは、かれを客觀的に評價する歴史的地位を少しも割引することではない。ロシア革命はかれ一人の力であつた。その教へには尙將來の社會的變革が姪まれつゝある。

### 6 ロンドン人の氣風

巡禮に墓詣りはつきものである。「新巡禮」の課題を與へられた私が、「新思想」の大御所カール・マルクスの墓詣りに、思はぬ長談議を費やしたことは、必らずしもさう脱線だとは思はない。が、私が特にこゝでマルクスの墓を引き合ひに出したのは、世界の危険思想を一手に買ひしめ

てゐるやうなマルクスが、このロンドンで落ちついて、あの世界的記録たる資本論を書いたことだ。

かれは自由主義と資本主義を攻撃した。併し自由主義の寛量と、資本主義の蓄積である英國博物館の圖書館がなくて、どうしてその學問が生れたらうか。

『レニンも英國に来て居る時に、あの圖書館で一生懸命で勉強したんです。それが餘程印象に深かつたか、いよいよ革命が成就してからモスコウから、革命に關する書類を圖書館に送つて來ました』

ロンドンで有名な記者が、私に話した。

『ところが何しろその頃ロシアといふと危険の本尊と思はれた頃ですから、その箱に爆弾でも這入つてゐると思はれて、障はつてみるものもないのです。餘程経つてからピク／＼しながら、開けてみるとそれは貴重なロシア革命の文献だつたのです』

さういつてかれは笑つた。  
ロンドンに行つて、一番氣持のいいことは、人の議論などに神経を病まないことだ、ハイドパークといふ公園はロンドンの真中にあるが、その隅の方に廣場がある。そこでは夕方から――

――日曜には朝から、盛んな演説會があつて、こちらの隅にキリスト教を説いて居るものがある。とあちらでは無政府主義を説くものがある。印度獨立を説くもの、英國の帝國主義を罵倒するもの。そしてその廻りにグルリと聴衆が取り巻いてゐる。

聴衆の中から質問がある。辯士は持參の梯子の上からこれに答へる、どんな皮肉に對しても、機智を入れて應答し、日本なら必ず鐵拳沙汰になると思はれるところを兩方少しも激さない。

ロンドンの交通機關は路面電車は極めて一部にあるだけで、殆んど全部乗合自動車で客を運んでゐるが、これにはどこで飛びのつて、どこで飛び下りても、交通巡査などは何ともいひはしない。かれ等から見れば、立派な常識を備へてゐる以上、一々巡査の指揮などは受けないといふであらう。

巡査そのものも子供までポピー／＼と呼んで、愛すべき一個の存在である。道でも聞かうものなら、自分が連れて行つて教へてくれる親切がある。

英國に行つて、『自由主義』といふものが、心から會得できる。たとへばわれ等が洋食屋に行く。どこの國でも給仕長が控へてゐて、テーブルに連れて行つてくれるのが常だが、英國では食堂に這入つても、多くは案内する者もない。自分の勝手なところに坐ると、今まで先方で見てゐた給

仕がやつて来て『御注文?』はといふことになるのだ。

わたしは除夜の鐘のなる時、一人でピカデリーのあたりを散歩した。ピカデリーといふのは紐育に比すると、まるで田舎だが世界に鳴るさかり場だ。昔のやうに色の紙片を投げあふやうなことはないが、山のやうな人出で、狭い道は蟻の通る隙さへない。

忽まち道の真中に人山が群つてワツシヨワツシヨと押しあつて居るのだ。のぞいてみると、少し酔つた婦人を真中において、俗謡をうたひながら、はやしたつてゐる。誰が制裁するものもないし、何の秩序もないけれども、それで立派に秩序が保つてゐる。

『さすがに英國だな、あれが日本だつたら、直ぐ大喧嘩が始まるんだが……』  
私は羨やましくその光景を眺めながら、新年を迎へた。

## 7 自由主義の英國人

アメリカも、いろいろな人間を網羅してゐることで何處の國にも劣りはしない。が、ロンドンには、もつとほんとの意味で世界的だ。

あなたがピカデリーの洋食店で御飯を食ふとするか。あなたの隣りのテーブルには一家三人が

居つて一人の息子はオーストリアに、他はアフリカにゐるといふやうな話しが聞える。先方にはフランス人が覺束ない英語で喋つてゐるし、隣りにはインド人が居る。

しかし誰と一緒に歩いて、誰と同棲してゐるやうが、人は人だ。振りむいて見もしない。その自由さがロンドンに長く居れば居るほど住みよくなる所以であらう。

ハイド・パークの附近を通るとカタクカツといふ音が聞える。耳を傾けると、それは馬だ。何々公爵夫人といふやうな人であらう。子供と共にスラリとした名馬に跨つて、公園中にあるあの廣道を運動してゐるのだ。それが如何にも英國の古い貴族主義を現出してゐる。

アメリカが新しいものばかり追ふのに對して、この國では妙に古いものに執着したがる。アメリカからロンドンに着いて直ぐ感ずることは、街が如何にも古くて、黒いことである。黒いのが誇りは、なにも漆屋の店先ばかりでない。

ウエストミンスターの大寺院も眞黒なら、その隣りの英國議事堂も眞黒である。この黒い建物がテムス河の廣い流れに臨んで、尖がつた塔が流に姿を映じてゐる。その塔の一つには所謂ピツグ・ベン(大きな時計)が時を示して、大英國の行く手とタイムをこゝで教へてゐるのだ。

あなたが、も少し歩を進めてロンドン塔に行くと、英國の古さは、もつとよく分る。そこは十

五世紀頃の建物。石で出来て居るだけに五世紀以上の日月は少しもこの建物を朽ちさせて居らない。中には赤い制服を着たり、黒毛の大帽子を被つたりして居る異様な兵隊が居る。それは十世紀頃からの武人の風俗を、そのまゝに存続して居るのだ。英國は過去に、捨て得ざる執着を持つてそれを固く握つてゐるのである。

ロンドン會議の終りに、私は日本全權の事務總長佐藤尙武氏などと共にティムスの上流に遊んだ。水の悠々たる流れが、島國のそれではなくて大陸の風光を現はしてゐる。これは誰でもサザンプトン港に上陸して直ちに感ずるところで、その廣々としたところが、英國は島であるよりも大陸であるといふ感じを與へる。そしてその自然の影響がアングロ・サクソンの魂を造つて居るのであらう。

その歸りに私達はエートン學校に行つた。十二三歳の小學校の子供が、シルク・ハットで學校に通つて居る。その古い紳士教育が英國の誇りなのだ。それから私達はウィンザー離宮に行つたが、陛下がお出でであるにかゝらず、誰でも離宮の中が拜觀できた。

新しいアメリカと古い英國と——アングロサクソン民族の兩面だ。私は急に歐洲大陸の諸國が見たくなつて、飛行機でロンドンを出發した。

## 第二 飛行機で大陸へ

### 1 人間の目方

三月の始めになつて、日米交渉はやゝ具體的な數字に入つたが、その落ちつくさきは大體見當がつく。どう間違つても六割と七割の範圍以外には出でない。軍事當局者からいへば、この一割が大變な問題で謂はゞ死生の別れるところだが、そしてそれはわれ等にも同情は出来るが、併しわれ等見物人から見ると、二分三分の問題で、もみあつてゐるのは思ひ切りの悪い商賣人が、駄目なのを知りながら頑張つてゐるやうで興味の薄いこと夥たしい。

『今まで居つて、今になつて行くのか』

そらいふ言葉を英米の記者から浴びせられながら、私は三月四日といふにロンドンを立つて歐洲大陸巡禮の旅に出た。



ロンドンからオランダのアムステルダムに行く飛行機は、ロンドンの郊外から出る。私は珍らしく朝の七時といふに起きて十時に飛行場に着いた。

お客を一人一人にはかりにかけて、その上に荷物の目方を計る。まるで牛肉の切り賣りと心得てゐるやうだが、重さに制限のある飛行機では、まづ以て仕方がない。それなら三十貫もある大兵肥満の男と、われ等日本人のやうに小さいものとは賃銀を別にして、飛行賃をパウンドでとるやうにすると論理的なのだが、實際は人間の定額は大小同じで荷物の定量超過だけをとるので、譯がわからない。どうせ人種的區別をするのなら——歐洲にはそれはないが——そんなことまで區別をやつて貰ひたい。

そんなことを考へてゐると、飛行機のプロベラーがまはり出して、午前十時半に飛び出した。客は十五名ぐらゐるまで收容出来るのだが、この日はお客が五人。給仕が来て綿をくれる。音を避けるために耳にかへといふのである。

私は飛行機では大分おどかさされてゐた。知人が英海峡を渡つた時に、大變動揺して、生還する希望がないまでに酔つて、ロンドンに來た時には死んだ人間のやうな顔をしてゐた。乗るものにかけては強い私ではあるけれども、相當に酔ふことを覺悟してゐた。また實際、席の前には汚物を

を吐く用意の紙袋も置いてある。

併しこの杞憂は五分もすると直ぐなくなつた。たまにブランコについた時のやうに、スイツとする氣持の時はあるが、それも時たままで汽車の動揺もなければ船のローリングもない。尤も今日は珍らしい静かな日であつたからではあらうが。

## 2 上から見たベルギー

機は直ちに雲の上にあがつた。下界の様子が雲間から見えたのは暫らくの間で、後は一面に柔かい綿を投げたやうに、一面に白いものを敷きつめてある。先方に、も一つ飛行機が飛んでゐると思つたのは、自分達の飛行機が、その雲に映つてゐるのであつた。

一時間ばかりすると、下がひらけて來た。廣い土地に青い田畑らしいものがあつて、それに處々冬木立があつてゐる。スコットランドの方面を通るなら、もう少し山がなければなるまいがと、隣りの席の人の地圖を借りてみると、われ等はドバー海峡近くを飛んで、もうベルヂウムにあることが分つた。先刻の綿をちぎつて投げたやうな雲の層は海の上であつただけだ。

われ等の機はベルヂウムの海岸を北に北にと進んだ。海峡一つへだてただけで、かうも遠ふの

か、眼の下には視界を遮る雲片一つもない。農村らしいものが来る。ベルヂウムは世界一人口が稠密である筈であるのに、人家の少ないのに気がつく。日本が山が多くて、人口の割合にどれだけ耕す土地がないかと、今更想ひ出された。

町が来る。どの町も規則よく並んで、云ひ合したやうに屋根が赤い。一時、流行した日本の赤屋根がこの邊から傳はつたものだらうなどと思ふ。白いものが動いてゐるのは、洗濯物をどここの家でも干してゐるのだ。

マッチ箱を並べたやうだといふが、マッチ箱よりも小さい。あなたは子供の玩具の陶器の庭や家を見たことがあらう。あれだ、あれが飛行機から見下す下界の町だ。

学校の運動場であらう。人間が動いてゐる。まるで蟻のやうだ。あの蟻が、一人一人に意志と感情を有して、自己を主張しあつてゐるのだ。何といふ滑稽だ。私は大きな聲をして笑つてやりたくなつた。

飛行機がオランダの國內に這入ると、あの規則だつた田園が見えて来る。白く土ぬりの壁のやうに横たはつてゐて、その間を溝のやうなものが通つてゐる。ロッテングダムの近くには硝子で造

つてあるらしいグリーン・ハウスが澤山見えた。

ロッテングダムに着いたのはロンドン近くのクロイデンを出て一時間半ぐらゐる後である。

そこで客を下して、更にアムステルダムに飛んだ。三十分かゝらないでつく。直線に飛んでも二百何哩とかあるのを風都合がよかつたのだらう、二時間半ぐらゐるで着いたのだ。

### 3 オランダの風景

アムスト・ホテルといふ川に面したホテルに靴を置いて、私は自動車で町を見た。

第一に感ずることは、この町がよく水を利用してゐることである。自然の川が一つあつて、それが利用されてゐることは勿論だが、その外に運河が縦横に掘られて、それを中心に町が出来あがり、それを利用して運輸機關が出来あがつてゐる。なんでも現在三つあるが、更に一つを造るのだといふ。

誰も知るやうに、この國は水——海を利用して繁榮を造つた國である。日本が徳川三百年の間オランダのみに交通を許したことは平凡な事實である。昔しからこゝろいふ國柄であるから海の貴重なることは歴史的に體得してゐると見える。運河にも川にも立派な工事が出来て、この邊に費用

を惜まないことが分る。東京と横濱間の工事にすら少しも埒があかない國のことを私は考へた。

「一體、一等國とは何だ」

私はこの國が、町や、通つて來た村落の富んでゐるらしいのを見て、そう獨り言をいつた。一等國を軍備の大小で計る時代には、國民が食はないでも、大きな軍備を有する國を一等國といふであらう。併しそれが國民として永遠に行くべき道であらうか。

アムステルダムに新しい町の區域といふのが出來て居る。それは如何なる國の住宅地に比しても立派なもので、いづれもアパートメント式になつてゐる。街は無論コンクリートか煉瓦で埃り一つたゝない。

生活振りから、また風采からいつて、國民は中々富裕らしいが、併し自動車は澤山ない。非常に自轉車が多くて、若い婦人たちが乗り歩いてゐる。三人一臺ぐらゐの割合だといふから、日本より比率が多いわけである。

一番氣に入つたのは葉巻が安いことである。ロンドンではいゝ葉巻は中々手に入らない。それに第一非常に高い。英國はパイプの國である。オランダでは馬車の馭者が悠々とシガーをくわへて車の上にあるのを見て、シガー好きの私を羨やましがらせたものである。

それから今一つ、ロンドンから來て救はれたやうに感じたのは、金の勘定が樂なことである。英國のやうに通貨の數が複雑なところはない。ロンドンに二ヶ月以上居つて、私は結局ろくに金の勘定が出來ず、多くは先方の善意(グッド・フェイス)に待つたのを、しばしば友人から笑はれた。また金勘定の六かしいのを利用して、釣錢をこま化すパッド・フェイスのものが随分あるのも經驗した。

そこに行くとおランダは一ギルダは約八十錢で、日本金一圓と見ればいゝし、それが一セントの百よつたものだから、勘定で誤魔化される恐れはない。實際、英國のやうに混み入つてをれば、意地でも分らないで居りたからうではないか。

#### 4 大陸の第一印象

金の勘定は樂だが、運轉手や新聞の賣子などは、外國人の旅行者だと見ると、ともすると誤魔化そうとする者が多いやうだ。私はホテルからの自動車でも、停車場でもこれを發見して、それを不快に思つた。かういふ點で米國などは、ビジネス道德が發達してゐて、そういふことは殆んどない。

驚いたことは英語が、どこでも分ることである。煙草屋に行つても、百貨店に行つても、誰でも英語を使ふ。しかもその調子の中々いゝ。特にアメリカのお客が来て金を使ふから、かうした商賣國では英語を金儲けの道具と心得てゐるらしい。

物價は英國に比すると大分安いやうである、こゝらへ来てみて、英國の貿易がなぜ不振であるかど分る。あんな高いものを造つて、どこの國が買ふものか。英國で今、日本と同じやうに産業の合理化といふことが問題となつてゐるが、餘程物價を引き下げなければ、製造品輸出國としての將來はないと思ふ。

アムステルダムの名物はダイヤモンド工場だが、こゝには三百人ばかりの職工が働いて、ダイヤを切つたり、みがいたりしてゐる。これが妙に全部猶太人だそうだ。

『これは幾らだい』  
と聞くと、その店員が目方をかけてみて

『千八百圓ばかりです』

といつた。おれはダイヤモンドとは祖先の時代から性があはない！

この町にマーケットがある。大きな廣場で屋臺のやうなものを造つて、何百といふ店があつて

野菜から古物から洋服から何でもある。これが矢張りみんな猶太人なんだそうだ。運轉手の説明ではこゝに三萬人ちかくの同種族が居つて部落をなして居るといふ。

始め私はヘーグに行つて、世界平和の發祥地を見るつもりであつたが、名所古跡を見るのは矢張り私の柄ではない。私は翌朝直ちにベルリンに立つことに決めた。

ホテルに歸つて風呂を浴びる。山のない國だけに水が濁つてゐて悪いのに氣がつく。それにアムステルダム第一のホテルだといふのにこの舊式なことはどうだ。

(翌日(三月五日)ベルリン行きの汽車の中でこれを書く。どこに行つても平原だ。白樺らしい木が白い肌を出してゐるのが目につく)

## 第三 中央歐洲の卷

## 1 大陸の汽車旅行

「大陸を旅行されるのには餘程氣をつけなければいけませんよ。失禮ですけれど……」  
ベルリンからウインに行く汽車の中で、同じ室に据つた愛蘭のダブリン市の商人が、さう私に話しかけた。

汽車の中の會見ほど奇しい、淡いものはない。どこの誰とも分らない人と話し始めて、相當に氣心が分つた頃は、もう右と左に離別せねばならぬ。それは恐らく最初にして最後の友情であらう。地球の果と果に住む二人が生きて再びどうして相會する機會があらう。しかしそれで何時までも記憶にこびりついて抜けないのが汽車の友である。

「大陸の人間は中々油断がならん。あなたは一人旅のやうだが、汽車の中で知らない人から煙草などを貰つてはいけません。よくその煙草の中に麻酔劑などを仕かけてあつて、眠らしておい

て仕事をする者がありません」

商品の仕入れに始終旅行して、旅馴れてゐるかれは、私にそんなことをいつて注意してくれた。いかにも汽車を部屋に仕切つて一定の人数しか入れない大陸の汽車では、そんな探偵小説みたくな罪悪も行はれるにちがひない。

われ等に乗せた汽車は東へ東へと進んだ。オランダから伯林までは、見渡すばかりの平原であつたのが、東に行くに従つて山が多くて、其崖がところ／＼に赤肌を出してゐる。自然は人を感じるといふが、この邊のドイツ人が剛健を以て鳴つてゐるのは、かうした影響があらう。

「ベルリンはどう感じたネ」

かれは私にドイツの印象を聞いた。

「直ぐ氣のつくことは私娼の多いことだネ。道を通つても、カフェーに行つても、女でまるで眼をつきさうぢやないか。ぼくはあの着飾つた女にドイツの大戦後の疲弊が表象されてるやうな氣がして淋しい氣になつたよ。だつて女が食へなくなれば、身に持つ財産を提供する以外に道はないんだからネ。ところで警察は何にもしないんですか」

「警察？ 警察つてもものはそんなところに無暗に手を出しやしませんよ。食ふ道を講じてやらな

いで取締ばかりするなんてことは國民が承知しやしない。併し、さうかといつて無制限にやらせるのでなくて、なんでも鑑札をとらせると聞いてるますがネ」

私は綺麗な町——恐らくは何處の首都に比しても最も綺麗なベルリンの街頭に動くストリート・ウォーカーの群と、それからバリーの夜を凌ぐといはれる伯林のエロ街とカペレーを想像しながら、大戦が無惨に踏み荒した國民の道徳心を悲しく思つた。

『しかしドイツ人は矢張り偉いよ、ドイツ人は決して戦争に敗けはしなかつたよ』

私は遽て、さう云ひ足した。ドイツを通ると、この國民の偉いところ、そして戦争がこの國民の意氣を殺しつくさなかつたことがよく分る。夜の街はドイツ人の一面だ。その一面でドイツ人全體の評價ができるか。……

## 2 失くなる英語

チエツコ・スラバキヤの都ブラーグに着いたのは午後三時半であつた。歐洲大陸を東に行けば行くほど英語の勢力がなくなつて、ここらではもう片言を使ふものもない。これでも學生の時にはドイツ語を二ヶ年やつたが、いつの間にかこれを返却して、今では然りと否ぐらるが關の山。

啞の旅行といふのはこのことであらう。

今朝もベルリンを出發する時に、荷物を列車についで、私は新聞買ひに出かけた。歸つて來てみると、確かに先刻おいた筈の列車が見當らない。時計をみると出發時間までにはもう五分しかない。先きを急がない旅だから乗り遅れたつてかまはないにしても、財産全部を入れてある鞆と東西への分れば、お輕勘平が切れるよりつらい。

『一體どこに行つたんだらう』

私は青くなつて探した。いくら科學の進歩したドイツだつて、汽車の神隠しなんといふことはありはしなからう。併しあわてれば遽てるほど言葉が通じない。マラソンのやうに附近を駆けまはつて、少し先方の線路の上に私の汽車を發見したのは、出發時間一二分前であつた。

同じやうに言葉の通じないブラーグの停車場で私は赤帽に手眞似しながら外に出た。見るとこの停車場附近をウイルソンといひ、大きなウイルソン街がブラーグを貫いてゐる。

『ウイルソンの威力がこゝに及んでゐるのか』

私は改めて世界大戦の最後において、巨人のやうに立つてゐたウイルソンの姿を想像してみた。アメリカといふ強大な勢力を背後にするかれの理想主義が、どれだけ疲れ切れた歐洲國民の肺腑



に訴へたか。正義、人道、愛國、さうした幾つもの美名の下に開かれた戦争が、その齎らしたものはたゞ悲惨と飢餓のみであつた。その惨めさにおいて勝つた者は、決して敗けた國に劣らなかつた。この時に米國大統領ウイルソンが、所謂十四ヶ條を並べて「勝利なき」平和を締結しようといふのである。

「當時のウイルソンは、まるで救ひ主のやうでしたよ。かれが歐洲大陸を旅行した時には市民は字義なりにかれの前に跪まづいて拜しました」

汽車の中で乗り合せた人が、そんなことを話してゐるのも想ひ出された。パリにウイルソン街があり、マルセイユでも同じ名の波止場に打つつかり、イタリーにもかれの名を冠した場處が少なくない。秋の風が枯穂をなでるやうに、かれの平和論が歐洲全土の心をとらへた状態が目に見えるやうだ。

しかしそれから十年の月日は流れた。人間は事にこりない動物だ。

### 3 ベネツシユ氏と語る

「やア、よく來たネ。多分こちらへ來ると思つて待つてゐたよ」

さういつて私を迎へてくれたのは公使の木村銳市氏（今の滿鐵理事）であつた。外務省で長いことアジア局長として敏腕を揮つた人。好んでこの閑地に來たのだが、さて三ヶ年も「人里離れた」ところに居ると流石に故郷が戀しくなる。

「欠伸して異郷の春を雪に籠り」

さう私の記念帳に書き入れて、公使は伸び行くチェツコの國情を語つた。

私が木村公使の紹介で、この新興のチェツコ國の中心人物である外相ベネツシユ氏を訪問したのはその翌日であつた。外務省はブラーグを一目で見下せる丘の上にある。日本公使館の自動車で行くと、兵隊がいづれも丁寧に敬禮した。

「ロンドン會議に來られたんですか。どうですか、成功の見込みはありますか。なに、佛國が餘り外敵といふものにビク／＼しすぎやせぬかつて？ 今まで外國のために何回も、ひどい目に逢つて居るのですから、佛國人の身になれば無理がないでせう」

ベネツシユ氏は私が坐ると直ぐ話し出した。かれの事務所は百疊敷きもあらうかと思はれる廣大な部屋だが、その真中にたゞ一つだけテーブルをおいてある。ローマでムツソリニ氏と逢つた時かれの事務室も同じぐらゐるの大きさであつたところから見て、あるひは歴史の古い歐洲大陸諸國

では、突然の侵入者に備へるため部室を大きくしておくのではあるまいか。

「あなた方の御成功の秘訣は何ですか」

私はかれに聞いた。かう私が質問したのはかれが貧しい百姓の子に生れて、新聞記者から、三十二歳の時に外務大臣となり、今は押しも押れもせぬ歐洲外交界の花形役者であるからではない。かつてはオーストリアの一部として陽の目も見ないやうな暗い屬國が、主にかれと、その恩師マサリツク博士の血の出るやうな奮闘の結果、今は中歐唯一の強國になつてゐる。その秘密を當人をして語らしめようとしたのだ。

「チエツコは昔しからあつたんです、なにも私共が造つたものではありません。東から来た東洋文明を食ひとめて、いはゞ壁の役目をしたのはこの國です……」

さういつて彼はハツと思つたらしかつた。東洋文明が西洋に侵入するのを禦いだことを誇りにいはうとしたのだが、目の前に東洋文明の本家が控へてゐるではないか。かれは遽て、言葉を進めた。

「第二にはこの國民は極めて勤勉ですよ、町を歩いても直ぐお氣づきになるでせうが……それから第三には國家が決定した國策に對しては、その人を信頼してやらしてゐます。たとへばマ

サリツク大統領でも、私でもこの國の獨立以來續けて當局にたつてやつて居ります。この繼續性といふことが國家には大切ですよ」

かれの言葉には心から國を憂へる誠意が溢れてゐた。まだ四十六歳といふのに、若い時からの苦勞に疲れたか、顔には老人のやうな皺が織り出てゐた。

私は話しを聞いてゐるながら、「人」といふものゝ大切さを思ふた。チエツコの中心をなすポヘミヤは、世界からだらしない代表者のやうに思はれてゐた。ポヘミアン・ライフといふのは遊蕩兒の代名詞である。それが一度マサリツクやベネシユ、さて日本の山岡鐵舟にも比すべきソコール運動の創始者が出て、愛國運動を起すと、國民はまるで見違へるやうな健實さになつてしまつたのだ。

「あなた方のやうな健實な、そして賢明な指導者を得ましたことを、お國のためにほんとに慶賀します。御自重を祈ります」

私はお世辭でなくさういつて、この若い建國者の手を握つた。



## 4 深更のウインの町

ブラーグから、オーストリアの首都ウインまでは遠くない。汽車から外を眺めると、この邊の地味が、肥えてゐることが分る。「チエツコに来ては郊外に出てみなければ、その味は分らんよ」さう木村公使もいつたやうに、廣々と開けた平原に、明るい春の太陽が光を投げかけてゐるのがいかにも平和な感じを與へた。

ウインの停車場に下りたのが午後十一時すぎ、外はみぞれ交りの雨が降つてゐた。

「旦那こちらへ……」

と云つてゐる……言葉は解らないが、さういつてゐるだらうと解される男について行くと馬車にのせた。タツキシシーが澤山あるのに、と思つたが、もう遅い。

「インベリアル・ホテルに行くんだよ、インベリアルへ」

と私が英語でいふと、かれは何か云ひながら馬に鞭をあて、暗い街を飛ばした。

十分、二十分、馬車は少し賑やかなところへ出たと思ふと、また暗い街に這入つた、もう十二時近くになつて、人の通りも極めて稀である。

「一體、一流のホテルがそんなに遠いところにあるのか……もし言葉の分らない旅人だと思つて怪しげなところに連れて行つたら」  
不安な氣持がムラ、ムラと起つた。想起すと馭者が髯むちやで少し氣味の悪い人相であるのも氣になつた。併し馬車の馭者臺は全然離れてゐるし、かりに飛び下りて話しかけたつて言葉が通じない。

「どうにかならア。どう間違つても生命までくれとはいふまじ」

いよ／＼方法がなくなると人間は度胸が据るものである。私は相當に薄くなつた財布から紙幣をぬきだして内側のポケットに入れ、氣持だけ身構へた。馬車はまだカタリ／＼と暗い街を走つてゐる。西洋の探偵小説では、よく祕密の都としてウインを題材にするが私はその小説の主人公のやうな氣持になつたことを自から苦笑した。

と、馬車は突然明るい町に出て、暫らくすると止まつた。扉をあけてみると、それが目指すインベリアル・ホテルなのだ。

「なんだ、ホテルへ来たのか」

私は握りつめた拳を持つて行きどころのない時の感じをして馬車を下りた。

ワインで見るものも、ドイツがさうであるやうに、廢された皇室の遺品と遺邸が重である。ナポレオンがモスコウ遠征に乗つて行つたといふ馬車があり、ゲーテやシーラーの銅像もある。かつては廣大なる勢威を有して仰ぎみる者もなかつた権力者が、時の流れに洗ひ落されて、今將た何處にある。ワインは歴史の苦しみを教へる都である。

併しそれよりも、もつと興味深いことは、この都が社會主義の統治下にある事である。議員の絶對多數を有して、これだけ自由に社會主義理想を行つて居るところはあるまい。町をバスで見物すると案内人は、

「あれが労働者のために建てた住宅です」

と説明した。すでに五萬戸收容するだけの建物を建て、労働者保護に對しては至れり盡せりの設備ができてゐる。

が、この都が疲れきつてゐることは旅行者にすらも分る、夜のワインはベルリンにも増して白粉の女が横行する。

「女たちにも制限があつて、なんでも二人以上は一緒に歩けないことになつてゐるさうですよ」と日本大使館の贅川氏が話してゐた。

## 5 警察國イタリー

アルプスの麓は、もう雪が降つてゐた。ドイツ方面の西歐洲は、三月半ばで相當に暖たかいのに、ワインを出てイタリーの國境に近づく、満山の雪だ。それがアルプスといふ感じを深くした。

汽車は山と山の間を進んで行つた。時間と距離を超越すれば確氷峠といつても、誰も疑はないであらうほど、信州の雪景色に似てゐる。イタリーの國境に近くなると、大きな岩が露出して、その上に家が見える。

「何と日本に似てゐることか……」

私は思はず、さういつた。自然が人間に大きな影響を與へるなら、日本人と伊國人の性格に共通點があるのに不思議があらうか。

日本に来て外國人は直ちに「警察國」であると感じるやうに、イタリーに這入ると、われ等は直ぐ軍人國、警察國に來たといふ感じを深くした。停車場にヘルメットの警官が居る。その上に制服の人が大分居るから「何だらう」と聞くと、「フアアシストだ」といふ。汽車の中の不正行爲

や外國人を取り締まるためなのだ。

私は、先ほど朝飯の時に食堂で知り合ひになつたドイツ人のクルム君とヴェニスに下りた停車場に下りると驚いたことには、ホテルの宿引がガヤ／＼と一聯隊近くの敷が居るのだ。

「こちらに来て下さい。ホテル×××です」

さういふ意味であらう、かれ等は飛んで来てわたし達の荷物をとつて案内しようとした。

私はいつか支那の奉天に行つた時に、宿屋の番頭が、山のやうに停車場に出迎へて蟻が一つの餌を奪ひあふやうに奪ひあつて居るのを淺ましく感じたことがある。イタリアの第一印象は、私にとつてよくなかつた。

ホテルにつくと今朝から出来た友人のクルム君が私に注意するのだ。

「ドイツあたりでは、イタリア人を盗む國民だといつて居るよ、氣をつけなさい」

私は汽車の中で、あるアメリカの青年が、十リラのお金を出して「これをどう思ふ」と聞いたのを想出した。「何でもないぢやないか」といふと「偽金をつかまされたんだ、イタリアに来て真先の失敗さ、油断がならんよ。併しぼくとしては國へいゝ土産だがネ」といつてゐた。

さういへばイタリアに来てから、誤魔化されさうな場合が非常に多い。ヴェニスの寺院の前で寫真をとつたが、十二枚四十リラと約束したのを、持つて来たのを見ると六枚しかない。汽車の上でも、店先のお剩りでも、少しも油断がならなかつた。私はお剩りをとる時は、私の手を先方が引つ込めるまで何時までも出してゐることにした。かれ等は兎の糞のやうにポツリ／＼と出した。引込めたが最後それで切りあげた。

ヴェニスの町は、さすがに綺麗であつた。シエークスピアーの畫いたシャイロツクのやうな顔が、そこらに轉がつてゐた。

「世界で自動車のない町はこゝだけでせう。たつた一つあるが、それはシヨー・ウインドーの中にあります」

と案内人が話したが、いかにも運河を縦横につくつて、高い橋をかけまはしてあるこの町では自動車は用をなさなからう。

## 6 衛生に悪い信仰

第二篇のムツソリニ會見記でも書いたことだがイタリアのお寺では、キリストや聖徒の像が、

みんな金製の靴をはいてゐた。

私はヴェニスで有名なお寺を見て、その大理石のマリアの像が、かつたる捧みたいにたゞれてゐるのを見た。善男善女が、後から後からと来て、それにキツスするので、磨り減つてしまつたのだ。日本には雨垂が石をうがつの諺があるが、あの柔かい唇が大理石をうがつのは信心深いイタリーなればこそだ。

いくら聖人でも、ペテロもポーロも男である。況んや獨身で死んで、生きてゐる間、ぼんのうの邪心からかれ等が苦しまなかつたとはいへなからう。

その獨身の聖徒たちが、今柔らかい舌でなめまはされるのだ。美人にキツスされた時に、あの大理石や鑄製の像が、ニツコリしたやうに思つたのは、無論斯く申す旅行者の僻目であらう。

私はローマのピエトロ大寺院で、列を作つてペトロの像の足にキツスをする老若男女を珍らし氣に眺めた。中にはハンケチでそこを拭くものもあるけれども、多くはそのまゝ唇をつけた。

「信仰といふものは衛生に悪いものだ」

私はさう思ひながら見てゐた。

聖徒は御獨身だからキツスされても氣持が悪くもあるまいが、寺の經營者としては、さう無暗

に、唇、聖徒の像に穴をうがつてはやり切れまい。そこでローマの像といふ像は殆んど、悉く草鞋をはかして居るのである。

これほどの國であるから、イタリーは如何にも抹香臭い。

暹羅の言葉に、「石を投げれば皇族に當る」といふがあり、皇族の多いのを諷してゐるが、ローマでは石を投げれば、必らずそれが僧侶に當るほど僧侶の數が多い。

また實際、歐洲を見ることは結局お寺を見ることなのだ。そこに藏されてゐる寶物と、壯麗な建物を見たゞけでも、歐洲の中世紀といふものが、どれだけ宗教を中心にして回轉してをつたかゞ分るのである。だからベルリンに始まつた歐洲大陸見物は、明けても暮てもお寺と美術の見物だ。不埒なことに宗教心と美術心の缺けてゐる東洋の一旅客には、「またお寺の畫か」とウンザリさしたものである。

美術と宗教に大した關心を持たない私は、イタリー見物ではどうしても抜いてはならぬフロレンスにも下りなかつた。

「フロレンスに下りない？ 惜いではありませんか」

ヴェニスから一緒になつた米國人夫婦が、私にさういつた。窓外を見ると、もう桃が咲いて、

日本の春景色に酷似してゐる。

「繪は、もう澤山なんです。あれ以上見てもゴツチャになつてしまひますから。それにまだローマでも見ねばならん……」

「それはさうですネ。私共も國を出て一ケ年になりますが、毎日繪を見て暮して居るやうなものです」

この夫婦は私のいふことに同意した。

繪とお寺から遠ざかつて、イタリーでは社會と人間を見よう。私はさう考へてローマに降りたのであつた。

## 第四 バリを捜る

### 1 バリの夜の街

××兄——

「夜のバリを通信するのに、乞ふ叙述のくどきを遠慮するなかれ」といふ君の手紙は正に受取つた。バリといへば直ぐ「夜」を想出し、その光景を聞いたがるのは、なにも君だけではないが遺憾ながら君は、それを語らせる人選を謬つたよ。頼まれれば、越後から米つきともいふが、いくら力があつても辨慶に浅草は語れまい。僕は「夜のバリ」むきには出来あがつてゐないんだ。

それに近頃はバリも漸次、その邊のことについて嚴重になつてゐるさうだよ。ある友人の話だつたが、現在の警視總監に當る人は、あまりひどい場所は閉鎖する方針をとつて、昔のやうな無茶なところはさう澤山はないさうだ。あつても排他的なクラブ式になつてゐて、無暗に旅行者は入れないといふんだ。

けれどもそれはパリを昔しに比べての話で、パリは依然としてパリさ。なにしろ外国人の旅行者が非常に多くて、その財布の中には恐らく夜の街のために使ふ幾何かのエキストラが入つてゐるだらうからネ。現に我等がアメリカから英國に渡つたオリンピックでお客様に見せた映画の中には「パリ——誘惑の町」といふのがあつて「奥様方御用心」などいふ文句と共にキヤフエーやキヤシノの光景を映し出し、男の客たちをヤンヤといはしたものだつた。金のことについては、恐くは世界の國民の誰よりも細かい——悪くいへば汚ないパリ人が、このエトランゼの財布の金を見落すわけではないんだ。一昨年度(一九二九年)にフランスで外國旅行者が使つた金が八億圓……アメリカ人だけでも六億圓ぐらゐるは落した筈で、このためにタルヂユ内閣は觀光次官を新設して一層これに力を盡すことにしたほどだ。

考へて見てください。一ケ年に八億圓といふ金は、日本が汗みどろになつて働いて輸出する生絲の總額よりも多いんだぜ。この半分が日本に這入つたら、日本の不景氣などは、どこかに吹つ飛んでしまふ額だよ。フランス人がこれを御辭退するほど聖人でないのは無論さ。

それならこの金をうるのにはどうするか。道をよくしたり、外客の便利の施設を講ずるのは勿論の一つだが、パリの夜を盛んにすることなども忘れてならないことで、パリの當局が取締る

といつても、取り入れるお金に實害のない程度なのだ。だからパリでは芝居に行つても、カベレ一に行つても、魔性の女が目をつくほど澤山あるんだ。

外國人から金をとる癖のついてゐるパリ人は、全體が客引になつたといつたら、言少し過激に失するかね。あのコケチシユな、あの愛嬌のいゝ、あの社交的な、そしてあの華美な様子は、日本でも客對手にお金をとる商賣によく見るタイプだよ。日本のホテルの雇人や、デパートに働いてゐる連中は、一寸パリジャンの面影がある。

## 2 客引きとチツブ

パリ人はみんな客引になつてゐるといつたつて、それを悪く取られては困るよ。それは半面には、よく氣がついて、客に満足を與へることも意味するんだからネ。

パリに行くとき、直ぐこの客を外らさない、馴れ馴れしさを感じるんだ。デパートに行つても、その賣子の溶けるやうな様姿が、旅人である君の心をときめかさせる。ホテルに行くときそこに口紅を真赤につけて、スラリとした婦人が、顔を傾けてニツコリする姿に打つかる。況んや君がキヤフエーに行き、下街のバーにでも行くと君は愛嬌の卸問屋にでも來たやうに感ずるであら

う。だが、それを以て君が直ちに發展的段階……無産黨員にでもいはせれば、さうもいふであらう段階に達したと思へば君は間違ふよ。

その愛嬌の多量生産が客引きパリの常態なんだ。

ところでこのパリは必然にそれに要する習慣を生み出している。その一つはチップだ。心づけばパリの生活の一つで、たとへばパリのタツキシにつて、そのメートルに出た料金だけをやつたのでは、君は恥をかかぬ。日本なら當節の不景氣には宿屋に宿つても、忘れたやうな顔をしてすばしこく靴をはいて逃げ出せば、茶代請求に後から追ひかけて来るやうな番頭も居るまいが、パリではさうはいかんよ。

パリへついて二三日してぼくはキャシノ・ド・パリに行つた。タツキシを下りるとそこにボーイが居つて、手早く外套をとつて、あづける場處に案内した。これに某しの銀貨を握らせると、今度は番人の女が欲しさうな顔をするからこれにまた何程かをやつた。それから切符を持つて席につれて行つた女が、これまた中々動かない。これにも幾らか出した。金はいゝとして……半疊を入れるなよ、金に糸目をつけないぼくであるにしても、そのうるさうにたへなからうぢやないか。『そんなものをやらなきやいゝぢやないか』と君はいふかも知れないが、さうはいかない。現

にぼくの前に坐つた一對の佛國人の男女は、案内の女に幾らかやつたが、その女は銀貨をなでみて、更に手を出すんだ。つまり二人分にしては少ないといふんだネ。花かごみたいなものを持つてゐて、それにシヤラ〜いれながらの催促だからたまらない。

その男も仕方がないから濫々と追加してゐたのを見たよ。

米國人などはこんな習慣にたへない。そこで何でもバラマウント會社では、新らしくパリに劇場を出して、チップは一切いらぬことにしたさうだ。フランス人としては貰へるものを何故貰はないのかと笑つてゐるかも知れないよ。

チップといへば歐洲大陸は、總じてその煩にたへないほどこれを欲しがらんだ。ウインに行つた時に僕はカペレーを覗いてみたが、入口でチップをとる、便所に行くところ人に居るからやらねばならぬ。酒を飲んでチップをやるのは當然としても、音楽が一わたりすと、矢張り帽子を持つて集めにまはる。かねて聞いてゐたから、ホテルを出る時に、少し大袈裟にいふと身體が前にのめくるくる銀貨を澤山持つて行つたが、そこを去る時には、ポケットは賽の河原のやうにカラ〜になつてゐた。

ドイツではホテルやレストランは法律によつて一割づゝビルにつけて来るが、それだけで後を

やらないといふわけにはいかない。もしそれイタリーになるとチツプを欲しがることシーザーがクレオパトラの唇を欲しがつたほどに執着が甚だしいんだ。

英國やアメリカは、チツプはやればとるに違ひないし、また實際ある程度まではやりもするのだが、チツプによつてサーヴィスの厚薄が目立つほど甚だしくはない。

歐洲が——殊にパリが客引になつた著しい例だよ。

### 3 ナポレオンと藝術

客商賣のバリが、しかし客を招くにたるだけの魔力と美を持つてゐるのは事實だ。西洋の諺に『凡ての人は二つの國を持つ、一つは自分の國で、今一つはフランスである』といふのがあるが、いかにも西洋人ならば常住起臥する場處を故郷の外に、今一つパリに持ちたからうね。

君はかりに、パリツ子に習つてパリの町を散歩してみろ。どこの街の辻、どこのブルバードに出ても、君は屹度フランスでなければ見られない調和した藝術を見るだらう。ニューヨークは直線であつた忙がしい。ロンドンは圓味があるが、どこか田舎紳士の面影がある。ベルリンの町は綺麗だが、ドイツ人の機械的な正確さが出過ぎてゐる。ローマも中々いいが、全體としての調和が

ない。建物と青葉の線と色を全市に浮して繪のやうにしてゐるのがパリである。

こゝで一寸説明しておくが、英國人や米國人なら、仕事を終ふか、暇があると、直ぐゴルフか郊外かに飛び出してしまふが、パリ人になると、一寸細いステッキを持つて町に出かけ、あの乙にすました様子で散歩をするのだ。だからロンドンやニューヨークでは土曜の午後や日曜は——もつともニューヨークでは土曜は一番賑かな日だが——ダウン・タウンは場末の墓場みたいに静まりかへつてゐるが、パリはその日が却つて賑かなのだ。

この散歩者の波に押されて君はまづエツフェル塔にでもあがつてみる。これはパリ第一の高塔で、旅客に美しいパリを見せびらかすために造つたやうなもの。エレベーターの代價を二つに仕切つて、一番上が幾ら、中腹が幾らと二通りの入場料になつてゐる細かさもパリらしい。併しその頂上に上つて、青葉がぐれのパリの町を俯瞰すると、君は決してそこに行つたことを悔いはいしないよ。

なんとといふ美しさだ。それよりも何といふ調和だ。目の下にはコンコードの廣場が見えて、ルブル博物館が白く立つてゐる。セーヌの清流が帯のやうに光つて、その近くに代議院と外務省がある。圓く高いのはナポレオンの墳塋であらうか。尖つた黒い建物はノートルダムであらうか



その前の日、ノートルダムに行つた時に、案内人が「こゝでナポレオンとジョセフィンが結婚したのです」と椅子を指さしたが、一世の英雄が戀ならばこそ、胸をとぎめかせて、乙女のやうなしをらしさで坐つた光景が想ひ出されたのだつた。

パリの大路シャンゼリゼーの盡るところに凱旋門が見える。ナポレオンの造つたもの、十二の廣道がそこを基點に四方に——正確にいへば十二方に放射されてゐるのは、かれが世界の十二の大國の首府に通ずるためであつたといふ。かれの野心は、露のやうにコルシカの孤島に散り果て、この凱旋門の完成をすら見る事ができなかったが、かれの残した藝術は今なほ世界の旅客をして、そゞろにかれを偲ぶ念にたへさらしむ。生命は短かくして藝術は長し。世界よ、フランスよ、顧みざるか。

#### 4 秀吉の朝鮮征伐

「朝鮮に行つた日本の武人に、なぜこの心掛けがなかつた。なぜ日本の藝術に永遠の光りを添へるものを持つて歸らなかつた」

その日のぼくの日記を見ると、さう書いてあるんだ。英雄主義でないけれども、パリに行つて餘

りにナポレオンの存在の大きいのに驚いたよ。パリを見ることは、即ちナポレオンを見ることなんだ。ヴェルサイユの宮殿を見た序に、ぼくはかれとジョセフィンの過した家を見たが、そこには家庭のナポレオン、武人ならざるナポレオンの一面が出てゐる。フランスの法律書その他の書籍が、書齋一杯にギツシリつまつてゐた。

「この家にジョセフィンは最後まで住んでゐました。ナポレオンがいよくセント・ヘレナに流される時に、かれは許されてこゝに立寄りました。かれは久し振りでジョセフィンと逢ひ、想出多きこの部屋の中で一時間許り泣いたといひます。ジョセフィンを離婚したことを心から悔いたのです」

と、案内人が説明した。人間ナポレオンの姿が踊つてゐるではないか。

このナポレオンは君も知つてゐる通り渦のやうに歐洲大陸を荒れまはつた。その難戦苦闘の間に、かれには少なくとも二つの忘れえないものがあつた。一つは愛妻のジョセフィンで、もう一つは他國の「美」と藝術をパリに移しうゑることであつた。パリに行つて何よりも旅人の眼に映るのは、ナポレオンが征戦の結果お土産として持ち歸つた異國の藝術だ。僕が秀吉の朝鮮征伐を想出したのはこゝだ。

考へてみ給へ。世界の町でパリほど革命沙汰の頻々たるところはなかつたよ。コンミュンの混  
 亂ほどのものは澤山はなかつたにしても、パリは革命の根源地だ。一世紀に亘つて十年か十五年  
 に一回ぐらゐるづゝは大きな騒動があつたものだ。この革命や市街戦が他國であつて見給へ、まづ  
 眞先きに打ち壊されるのは建物や寶物だ。それがパリ人になると、生命は失くしても、パリの美  
 だけは打ちこはしたくはなかつたではないか。そこにパリ人の特長があるんだ。

### 5 パリの調和美

パリに行つて感ずることは、自分はどこに居つてもパリの中心に立つてゐるといふ風に考へる  
 ことだよ。君は品川に居つて東京の真中に居ると感ずるかね。あるひは神田に居つて東京の中心  
 だと考へるかね。さう考へるにはどうしても銀座か、せめては丸の内に来ねばなるまい。が、僕  
 はパリに居る間、セーヌの橋の上にも、凱旋門の下にも、無論コンコードの廣場にも  
 も、パリの中心がそこにあるやうな気がした。それほどパリはその場所々々が入念に造られてゐ  
 る證據なんだ。

パリ人がパリを愛するのと、佛國人が敵をこはがるのは二つの特長だ。パリはその調和美をこ

ぼつことを恐れて、パリの町に摩天樓(スカイスクラツパー)を建てることを禁止してゐる。ま  
 た實際ノートルダムやコンコルドの近くに五尺上につき出たビルヂングを建てても、まるで打ち  
 壊しだからネ。併し人が増えて、交通が増して、その必要に迫られる時に、そんな悠長なことを  
 いつてゐられるかどうかだ。もつともパリ人はパリを二つに分けて市外見たいなところを建築勝  
 手次第にしようとしてゐるやうだがネ。

パリとフランスの當面する問題は、なほ將來にあるよ。

### 6 悠長なるパリジャン

パリ見物が馬鹿に理窟に落ちてしまつたネ。エツフェル塔の上で、ものを思ふといくらでも長  
 くなるから、こゝらで下りることにするが、たゞもう少しそこいらを歩かしてくれないか。理窟  
 の云ひ放しではパリ見物には不向きだらうから。そこからジャンゼリゼーの大通りに出るとしよ  
 う。誰も歩いてゐるからパリのタツキシが便利で安くて、乗る必要はないが、その歩くのを餘  
 り早くすると君はパリ人ではないぜ。悠くり悠くり、銀ブラをやるつもりで歩けばそれがパリ式  
 なのだ。とに角、パリは悠長だよ。

シヤンゼリゼーの大路を歩くと君は、處々にキヤフエーやコーヒー・シヨツブを澤山見るだらう。しかもそこだけは天下御免で道の真中までテーブルを出して、そこに紳士淑女がコーヒーやワインをすゝつてゐるんだ。パリに來ると洋食屋が一個の私的營業ではなくて、公園や學校と同じく公共的インスチテュションであることが分るよ。さう解釋しないでこゝだけがどうして天下の公道に出ばることを許されよう。

ウインの公使館の贊川氏に聞いた事だが、キヤフエーといふ文字はコーヒーから出たといふ事だぜ。お互ひに寄つてクラブでコーヒーを呑んで談ずる、其が營業に進展してカフェーになつたんださうだ。さう聞くと歐洲大陸の東の方やフランスで、コーヒーを一杯のんで午後の全日をそこに暮す意味が分るんだ。

アメリカから來るとこの悠長さが特に目に立つ。フランスのある學者は佛國人とアメリカ人の勞働力を研究して、『アメリカ人は映畫劇場に行く切符を二十分で稼ぎ出すが、佛國人は一時間かゝる。アメリカの勞働者は一ポンドの砂糖をうるのに七分でいゝが、フランス人は三十五分は働かねばならぬ』といつてゐるが、この差は確かにあらうネ。

このキヤフエーに坐つてゐる人も、其前を孔雀のやうに通る人も、いかにも垢ぬけがしてゐて

客商賣のバリ人なるかなと思はせるのは前にも書いた。パリの女に比べると、ニューヨークだけは金があるから別だが、歐洲のどこに行つても田舎臭いぜ。が、それよりも旅人の記憶にこびりつくのは、何を食つてもうまいことだよ。

客商賣のバリは町の綺麗さで客を呼び、豊富な美術と歴史で満足させ、美人でひきつけ、料理で印象を興へ……それから夜の街で誘惑するのだ。夜の街！それはほんとにパリでなければ見られない情緒だ。始にこれを君に書くことを約束しながら、それはもう書くスペースがない。いづれ他日のお楽しみと勿體をつけておかう。だが、かう客扱ひがよくても、僕は一週間もパリに居つたら、もうどこかに行きたくなつた。それは餘り出來すぎ、氣がつきすぎてゐることから來る倦怠だ。目から鼻にぬけるやうな才人の傍にゐると、われ等は却つて満足が得られなくて、寧ろ少しボンヤリしてゐる貫つた方が氣樂なものだ。才人のパリに飽きて、鈍感のロンドンがなつかしくなつたことについて君は僕を笑ふかネ。

## 7 土のフランス

夜のバリだけに佛國人の全面があると思ふのは、フランス人を正解する所以ではない。ほんと

の佛國人は、もつと他にあると僕は思ふね。

マルセイユから汽車に乗つて、僕は眞一文字にローン河に添ふて、南フランスを横ぎつたが、見渡すばかりの平原を見て、僕は新しいものを發見したやうに驚いたんだ。それは『土のフランス』だ。柔かい線の畑や野原の極まるころ、黒ずんだ山に夕日が照り映えて、それが眞赤に雲を染め出した。その雲の一片々々が、花が散るやうになくなると、その山の下から電燈がギラ／＼と輝き出した。僕はその美しい光景に見とれて、急行列車の窓に二三時間も立ちつくしたことを、今でも忘れない。

僕はスイ／＼と立つた立木を見ながら、ポール・モランの言葉を想出した。

『わが國の中流及び勞働階級の誇りは野菜畑だ。この機械時代にその誘惑がかれ等を土に引きこむのだ。ストロベリーと大根に満ちた野菜畑が、かれには家庭だ。英國人の第一の趣味がゴルフやテニスにある時に、かれの趣味は農園にある。英國の鑛夫は一日の仕事の終りにフットボールをやりに出かけるのに、佛國の鑛夫は元來が農夫であるから、その農園に行く』

この土に執着を持つ佛國人を考へると、佛國美術が多く土に附いたものであること、理由が分るだらう。がそれと同時にかれはまたいちじるしく、個人主義的であり、また節儉家である。か

れ等は實に世界のどこの國民よりも、けちであり、利己的でもある。

佛國の有名な經濟學者シーグフリードの書いたものの中に

『佛國人は社交的だといはれる。さうだ、かれが會話を樂しめる間はかれは社交的だ。だが、かれの家族と、かれの商賣と、かれの個人的事件に關することになると、かれは斷じて他を許さず、その家庭を城砦のやうにして他を受け入れない。つまり貴方がかれと中立的立場で逢へばかれは魅力的ですらもあるのだが、利害が伴ふとそれは全然違つて來る』

とある。これは佛國に行つて誰もが經驗するところで、あの愛嬌が金の問題になると、七面鳥のやうにかはるのだ。

この點が支那人に似てゐるともいはれる。も一度ポール・モランを引かうか。

『支那人とわれ等の間には極めて似通つたところがある。たとへば物を、いつまでも修繕してそれを最後まで使はうとする經濟心。料理に對する同じ天才。古い世界の禮儀に注意深いところ。根深い、併し消極的な外國人に對する憎惡。社會的動搖から來た保守主義。公共精神の缺乏。それから何代もの病源を乗り切つた舊い國民の毀たれざる活力等がそれだ。古い文明といふものは結局同じやうな似通つたものを持つてゐると考へざるをえないではないか』

××兄——

フランス人が自國を解剖するのに、これほど大膽であるのも、飽くまで冷やかな、客觀的に物を見るかれ等の特長の一つの現はれだと思ふよ。

これ等を證明するために僕が見た佛國の議會の模様や、政治の狀態を話せば、もつとよく分るのだが、それをこゝで書くいとまはない。

たゞ君に、酒にしたる夜のバリが佛國を代表するものでないこと。それから境を接してゐても各國がみんな異なつた特長と性格を持つてゐて、これを世の公式論者のやうに一緒くたにするの大變間違ふことを知つて貰へば充分だよ。

他人の迷惑などは大概我慢してしまふのが僕の主義だが、それにしても長談議にすぎたやうだね。左様なら。

## 第五、歐洲踏査の實感

### 1 「日本人」の重荷

「このまゝ死んでしまつたら」

旅の宿屋で一人で寝る時に、フツとかういふことを想ふことがある。

日本の大使館や、領事館があるところなら、宿屋の番頭はまづそこへ電話をかけるであらうし、日本の役人が来て跡始末をするであらう。が、われ等の旅は役人の居るところばかりではない。一朝、宿の女中が来て冷たくなつてゐる體を見たら、一體どうするだらう。知らない人の間で、知らない間に葬むられて了ふだらうか」

縁起でもないことを考へるな、といふものがあつたつて、自分のことだから、飛ば散りは餘り遠くには四散しまし。

海の、たゞ中に孤舟をやるやうな氣持が、世界を旅するものゝ心である。どこを見ても知つた

顔は一人もなければ、私に注意を拂ふ人間も無論ありはしない。かれ等との交渉は、懐に多少藏してゐるところのお金の通用に限るのだ。

併しこの淋しい心持に、また云ひ知れぬ面白味がある。親類、知人に圍まれて居る楽しみは、晴れ着をきて、あたゝかくしてゐる時の楽しみである。一人で天下を旅する心持には、眞裸で太平洋を泳ぐ自由がある。誰にでも知られたくない気持は、人間と生れたからには誰も持つて居らうが、誰にも知られたくなく、自由に物を行ひたい野心も、人間になくはならない。

『このまゝ死んだら……』

と思ふ旅の心持は無論淋しいが、誰にも知られず、自からこの娑婆からお暇をとるのも痛快ではないか。そんなことを考へながら、枕を直して寝てしまつたことがよくある。が、この自由さに、私はいつでも一つの大きな不自由さを感じた。それは私が日本人であるといふことである。どう振り落しても振り落すことの出来ぬこの重荷が、私にどれだけ不自由をさせたか知れない。

歐洲大陸を旅行すると、日本人といふものをまだ見たことのない人間があると見てジロク／＼後から眺めたりするものがある。伯林の博物館を見に行つた時に、折しも日曜だったので、田舎から出て来た青年であらう。私が行くと立ち止つてはみてる者が多かつた。こんな時には、矢

張り洋服を一寸ゆすぶつて、ネクタイでも直したくなる。

『こんなことでいゝだらうではないか。大して優待もしなかつたし……』

もう軽くなつた財布を後生大事につかみながら、ホテルを出発する時にチップの額を、頭の中で論議することがある。

『日本人はケチだなと思はれるのも癪だから、まア奮發しよう』

元來なら忘れたやうな顔をしてすばしくクキシシーにでも飛びのつてしまふところを、矢張り一寸待てといふ氣になる。

いつか私はローサンゼルスで逢つた若い日本女學生の話しを忘れない。

まだ二十才ぐらゐの娘さんだつたが、日本から来る船の中で支那人の學生と懇意になつた。いろいろ話しをしてゐるうちに、

『日本人は支那問題をどうみてゐますか』

といふ質問が出たといふのだ。

『わたしどうしようかと思ひましたの。そんなことは考へたこともありませんし。下手なことをいつて、日本を代表するやうに聞かされても困りますし……あの時ほど日本人だといふ考へが頭一杯

になつて重い責任を感じたことはありませんでしたの』  
と私に話したことだつた。  
若い娘が、この小さな質問にどれだけ責任を感じるかを見よ。  
國家を一人で背負つて居るほどの重い負擔を、日本人は外國を旅行する時に感ずる。それは内地で感ずることの出來ぬ重荷だ。

## 2 ホームを持つ人間

イタリーのネーブルスに行つた時のことである。汽車がローマに近づくに従つて、私は何だか家に歸るやうな氣がした。  
住めば都で花が咲くといふが、人間は自分の本據をつくりたがるものである。四五日ローマに居つて、そこに荷物を置いてあるが故に、そこに歸ることに救はれたやうな安心を見出すのだ。そればかりではない。イタリーに居つた時ほど、私は心に緊張を覺えて、總ゆるものに對して武装してゐたことはなかつた。

オーストリアのウインから汽車に乗つて、食堂車に出た、定食を食つて、札を出すと、そのお

釣りが足らんだ。

『たらんじやないか』といふと、

『どうも失禮しました』と、一圓ばかりのものを返した。

かういふ経験から始まつた私のイタリー旅行は、自然に私をして武装させた。

ネーブルスに行くと、かねて電報を出してをいた日本人専門の案内者アントニオは停車場に來てゐなかつた。仕方がないから、雀のやうに騒がしい宿引き連で、一番後まで從いて來た男のホテルに行つた。停車場で見た繪葉書とは似ても似つかない貧弱なホテルであつた。

翌日ムツソリニー首相に逢ふ通知が來るかも知れないので、私は悠くりしてゐられなかつた。直ぐボンベイに行つた。

貸し切り自動車で往復百二十リラ(十二圓)といふのが、途中で通行税をとられたり、自動車ををく費用をとられたり、その上にチップをねだられたりした。

その晩、街を見物してゐると、馴れ／＼しく話すものがある。ホワイト・スター汽船會社の社員だといふのだ。トマス・クツク旅行會社の場所を聞くと、教へてあげようと一緒に來て『ボンベイ・ダンスを見ないか』とか『町の案内が要つたら案内しよう』といふやうなことをいつて分

れた。

翌日、聞いてをいた場所に行つたら、トマス・クツクの會社はなくて、まるで反對の方向だつた。巧妙に私を騙したのであることが分つた。

明るい、綺麗なネーブルスも、私には少しも愉快でなかつた。私は古靴を捨てるやうな思ひでローマに歸つた。ローマの姿を見た時には心からホツとした。

私は一ヶ月の歐洲大陸旅行を終へて、ロンドンに歸る汽車の中で故郷に歸る思ひがした。ロンドンには三ヶ月半近くを暮して、荷物がそこを置いてあつた。

今、私は紐育に歸る船の中にある。「歸る」といつた方がいゝほど、故郷に行く心持ちである。人間はどこに行つても自分のホームを造る。

### 3 ロンドンの自由主義

ロンドンに居れば居るほど、自由主義、個人主義が、かうも深く染み込んで居るかと思ぜられる。またイタリイが出るが、ローマの近くのチヴオリといふところに行つた時だ。トマス・クツク

の觀光車の一行で見たまはつたが、お晝になつて、レストランに行つた。

私が形勝のテーブルを占領すると、ヘッド・ウエターのやうな男が来て「お一人ならあちらに行つて下さい」といふのだ。私はムツとして、

「なぜこゝが悪いのか、なぜあちらに行かねばならんのか」

と怒つて、クツクの案内人が散々謝まつたことがある。

こゝで一寸辯解してをくが、歐洲大陸には人種的偏見みたいなものはない。偏見は獨身者——少なくとも一人客に對してある。一人者のお客には乾度、場末のやうな位置が與へられる。歐洲人といふ奴は、靴か飲のやうに、二つくつゝいてゐなければ、いけないと思つてゐるらしい。その時も成るほど、テーブルは四人分のもので、一人で占領されたら算盤上、儲からないものだつた。

一人主義でも二人主義でも、それはこちらの關するところではないが、こゝで關する問題は、どこに行つても、そこに誰か控えてゐてテーブルを指定することだ。日本なら宿屋までが、番頭の一とにらみで決定して、この客は梯子段下、あの客は床前つきといふことに相場が決つてしまふ。



そこに行くくとロンドンではお客が勝手に、どこにでも行つて据り込む。明治神宮外苑の大運動場みたいな大きな場所に、二人で頑張つても文句はいはない。先様御免で、後から来たものは開いてゐる場所に入り込むだけだ。

ロンドンには、ニューヨークが何といつてもまだかなはない世界一の大都會だが、その大きな繁華の町に左側通行も右側通行もない。自動車だけは通行の規則があるが、人間は左右いづれも御免だ。随分ゴタ／＼するだらうと思はれるが、それでゐる警官が眞赤になつて怒鳴りまはしてゐる日本などより、チャンと順序が立つてゐるから妙である。

私はブリマスから紐育行きの船に乗るべく、ロンドンを汽車で出發したが、喫煙車に人がゐたので、煙草ののめない車室を占領した。一等車で誰も他にもゐないので、私は煙草をブカ／＼ふかして、部屋を薩摩芋屋の釜のやうにしてゐた。

そこへ車掌が来た。この薩摩芋屋の釜がかれに分らないわけではない。何とかいふだらうとビクビクしてゐると、かれは外の方をむいて行きすぎてしまつた。

それが他人の迷惑にならず、社會問題にならないければ——煙草の煙りの社會問題もあるまいが——かれ等は見て見ぬふりをする。ロンドンのピカデリー街には、夜になると魔窟の女が出没し

て、瀬戸内海以上の危険航路区域といはれるが、それでも巡査などは何ともいはない。よく女が巡査と話をしてゐるのを見る。東京などのやうに、食ふ道も作つてやらすに、私娼や、密會をまるで強盗を追つかけるやうに、追ひまはすことなどは想像も出来ぬ。

『自分のことを氣をつけなければいゝではないか。なにも他人のことを心配するに當らぬ』  
それが英國人の心持だ。

だから黒ん坊と、花をあざむくやうな美人と手をくんで歩いてゐるやうが、外國人がおかしな國姿で練り歩いてゐるやうが、かれ等は少しも意としない。

こんな國だから思想や言論の自由があるのは誰も知つてゐることだ。自分は自分の立場を守つて、他人の説として聞くのに、何の危険があるものか。

『英國人は誰か負傷しても、あれは他人のことだからと立つてみてゐるぜ、屹度』

など、悪口をいつたものがあるが、そういふことになる、また中々親切であるから妙である。英國は温るい薬湯のやうなところである。這入つたばかりは可笑しいが、チツとつかつてゐると捨てがたいいゝところがある。無暗に自尊心があるのが少し癪に障はるが、それならこちらも自尊心を持てば、お互ひつ子になる。

わたしは矢張り英國が好きだ。

#### 4 フランスの船

歸りに私はフランス汽船を選ぶことになった。

これには無論いろいろな理由があつた。私は軍縮會議の最後の總會に出たいと思つた。ブリアンの演説を聞かないので、これを聞きたいと思つたのもその一つであつた。佛國は今までタルチュール首相が代表して、ブリアンは、あの特長のある眼を光らしてゐるだけであつた。

パリを六日で切りあげて、ロンドンに駆けつけてみると、總會は佛伊の交渉が、まだ間にはないので、延びてゐた。來週は火曜か水曜には必らずあらう。新聞はそうつけ加へた。

そこで私はその週末の船をとるなら、大丈夫總會に間にあつて、またあの錆びのある、一寸氣取つたマクドナルドの演説の聲が聞けるし、若槻全權の口の先きから出る日本語も傍聴できると思つた。

それが、みんな當がはづれた。全權達も随分努力したやうであつたが、その週間にまだ間にはなかつた。政治家といふ商賣は馬鹿に手間のとれるものである。

併し船には既に金を拂ひ込んだ後ではあるし、來週に延ばすわけにもゆかない。思ひ切つて私は出發した。

も一つの理由は、船がブリマスから出ることであつた。わたし達は來る時にホワイト・スターの船でサザンプトンに着いたから、同じ港から出るのは智慧がない。どこか新しいところから出發したかつた。それにブリマスは米國開國の祖ブリグリム・ファーゼイスがメーフラワー號で、新しい土地に宗教の自由をえんがために、帆をあげたところで、わたし達には親しい名前のところである。私は晩の十時半頃そこについて、小蒸汽で本船にあがるまで夕暗に突立つ小山を眺めながら信仰といふものゝ魔力を考へてゐた。

私が佛國船をとつたのは、もう一つの理由があつた。七ヶ月以上も旅をしてゐて、私は食物について、多少の判断が出來てゐた。

『君の舌は丸いんだな。鯛と鰯の區別がつかまら』

私は、かつてそんなことをいつて友達から冷かされたことがあるが——また實際、それぐらゐの無頓着屋でもあるが、ドイツとフランスと、イタリーと英國の料理の區別が出来るまでに各方面を旅行して來てゐた。



ドイツではスープに、ギラ／＼と油を浮かしてそのまゝ飲むのだ。わたしは矢張り氣味が悪いので、上のフアットの油だけをとつて呑んだ。ドイツの鳥——鴨だとかいつた——はうまかつた。イタリーの國境に這入つてから食堂車に出るとお晝にマカロニ——うどん——が出たのが、知つてゐることだがイタリーに來たと思はせた。ローマを出發して田舎の停車場で辨當を買ふと、そこにまたマカロニがあるのに驚かされた。マカロニとスパゲチはイタリー人の米の飯である。われ等から米の飯をとり去ることが、どれだけ淋しいやうに、かれ等にマカロニがなければ、どんなに郷土を失ふ感があるであらう。

ひどく痛かつたり、不意に事件が起つたりすると、われ等は日本語でなければ承知しないやうに、うんと腹が減ると米の飯が食ひたくなる。わたしはロンドンの洋食屋に行くつもりで宿を出て、どこかお腹の蟲が承知せずして、途中で日本料理屋に這入り込んだ経験がよくある。

パリから英海峡を渡つてロンドンに行く途中である。私はその食堂で夕飯を食つて、

『ア、ロンドンに來たな』

と思つた。食つたロースト・チツキンが、まるで木を食ふやうであつた。

ロンドンの食物はそれほどまづい。英國人といふ奴は、感覺が皆な頭の方に行つて、舌の味覺

が野蠻時代のまゝであるらしい。

もつともロンドンには安い洋食屋が、トラストのやうに發達してゐて、大概そこで間にあはせたりする者が多い。

『どこの國だつて金の安いものに旨いものがあるかい。それでロンドン子を批判するのは迷惑だぜ』とかれ等はいふかも知れない。それも一理はある。

なんといつてもいゝのはフランス料理だ。米國のものにも全然特殊な味があつて、ピフテキなどだけ懐かしかつたか知れないが、料理は矢張りフランスだらう。

その料理にひかされて私はフランスの船をとつた。葡萄酒は呑み放題だが、遺憾なことには、私は餘り左利きではない。便所に香水が備へつけてあるのも佛國らしい。

その船に私は一人の日本人だ。極めて自由だが、前についた『日本』といふ奴が食つゝいて放れないので『自由の窮屈』を感じるのが、唯一の不平である。(大西洋上にて)

第二篇

世界人の印象

# 第一 マクドナルドと語る

## 1 野外服姿のかれ

『カール・マルクスをロシアに移せつて?』

今まで黙つて聞いてゐたマクドナルドは、少し険しい聲になつて、かう聞き返した。

わたし達は赫々と燃える英國流の切り爐の前に車座になつて据つてゐた。石炭の火を背にして、灰留石の上に無造作に腰をかけて、兩足を投げ出してゐるのは、主人のマクドナルドである。膝までしかない粗末な野外服を着て、ソフト・カラーの垢染みてゐるのが、薄明るい燈にも目だつ。

『いちらにいらつしやい』

マクドナルド氏は私をさしまねいて、自分の傍の座布團を叩いてみせた。私がかれとすれすれに据つて、同じやうに床に足を投げ出した、日本の畳の上を想出しながら。

「日本の無産黨は選挙で大分成績が悪いそうではないですか。」  
 丁度、日本の総選挙が行はれた翌日で、その第一報がタイムスなどにも載つてゐた。かれはそれを讀んでゐたのだ。

「無産政黨間に協定が出来ないで、候補者亂立がいけないらしいです、惜しい人々が落選しました。」

私がそういふと、かれは黙して肯づいた。先程、かれは軍縮會議において各國の主張が一致せず、中々問題が困難であることを、呻めくやうな調子で話してゐた。かれの休息の場處に來たわれ等としては、時事問題に話題を持つて行くことが、いかにも商賣氣が多いやうで控えてゐたのだが、かれ自からその問題を持ち出したのだ。

「五ヶ國が、みんな社會主義内閣になると、こんな問題は直ぐ解決してしまふでせうネ……」  
 と誰か少し皮肉にいふと、マクドナルドは直ぐ

「それは無論問題じゃないが……」  
 と眞面目になつて引きとつた。

社會主義から話しは日本の選挙に移りそれからカール・マルクスに移つたのである。私は同氏

の書籍によつて、ロンドンのハイゲート墓地にカール・マルクスの墓を訪ふたことを語つた。

「隅の方の貧弱な場處にありますけれども、墓石は新らしく、誰があげたのか、生花が供えてありました」

私がそういふと、ある英國の記者が「なんでもソヴェート・ロシアであるの墓をロシアに移して貰ひたいといふ意見がありました」と、口を入れた。

この時である、かれがキツトとなつて聞き返したのは。

「カール・マルクスをロシアへ移せつて？ なんであの外國の土地へやれるもんか。」

かれはエリエン・ランドといふ文字に、法外に力を入れた。その聲には怒りをすら帯びてゐた。

## 2 マルクスとロシア

「カール・マルクスをロシアのやうな外國の土地へやるもんか。」

私はこの言葉を腹の中で繰り返して、愕然として主人公を見た。頭も髯も、もう黒いものが見えないまでに白くなつて、漸く熟して來た政治家としての圓滿さを示してゐるが、その額の横に

引いた大きな皺が、それから何よりもその爛々たる眼が、まだ生れつきの利かぬ氣を現はしてゐる。

マルクスとロシアと結びつけることに、憤激を覚えるかれの心持は、併し私には直ぐ分つたやうな氣がした。

マルクスとその一派が、どんなに生ぬるい英國流の自由主義、社會主義を嫌つたにしたらところが、たゞ一つ確實なことはこの英國人の寛大な氣持がなくなつて、あのマルクスの大業は生れなかつたであらうことである。私はマルクスの墓を見舞つた歸りに、英國博物館の圖書室を見た。そしてあの古ぼけた建物の中で、毎日、本の中に埋もれながら、研究に精進したマルクスの姿を想像した。

『もう閉館します』

と、いつまでも動かないマルクスに注意した番人が、當時も今と同じ制服を着て居つたであらうことを考へても見た。

各國を追はれたマルクスが、このロンドンの自由な空氣に包容されないので、どうして尻を落ちつけて研究に進むことが出来たらうか。この點において、ロンドンには確かにマルクスを「要求」

する權利がある筈である。

併しマクドナルドが、マルクスの本家争ひをするのは、それだけの理由ではない。

かれは元よりマルクスの經濟原理を、キリスト信者がバイブルを信仰するやうに信仰して居りはしない。いな、かれは『かれの經濟原理の正當性は疑問の餘地があるといふ程度のもではない。またかれの歴史哲學も同じ位置にある』といつて、その經濟論に承服しないことを明らかにしてゐる。(Socialism ; Critical and Constructive, p. 43)。

それならマルクスの偉大性はどこにあるのか。マクドナルドによると――

『マルクスは勞働階級に對して、かれ等が何等かの政策をとることにより、その自由を獲得する希望を與へた最初の人である。かれが示した政策といふのは、勞働階級の精神を鼓舞し、その理性に訴へたるものである。また戰闘の結果による戦利の獲物と、敵に對して深刻な敵愾心をハートに植ゑつけることにより、最大限の戰闘心をかれ等に吹き込むやうに戦線をしいたのは、かれを最初とする』(同書)

故にかれはマルキシズムをそのまゝ信じない。『マルクスはマルキシズムがなき後に残るものなのだ、即ちマルクスはマルキシズムより大きく、より包括的である。これはマルクス自身も認

めたところで、かれはある日、その弟子、或は自稱弟子が喧々囂々として口論するのに耳を蔽ふて「天に謝す、私はマルキストでないことを」叫び出したといふことである。將來に残るものはマルキシズムでなくて、マルクスである。これがマクドナルドのマルクス観である。

かういふ立場に立つたのであるから、マルキシズムを金科玉條とする人々に對しては、公然これに白い齒をむけることを辭さない。かれが自から礎きあげたといつてもいゝほどに、四十近くの間守り育て、來た獨立労働黨と絶縁したのは、今から三四日以前のことである。

その頃また英國ではロシアの宗教迫害が大きな問題となつて、保守黨は對露國交斷絶を主張してゐた。勞農ロシアに寛大であるかれも、この態度には深い憎しみを持つてゐた。

「私の僚友も、私自身も、宗教迫害に對しては憎惡の念を持つてゐる。これはわれ等が民族として生れ繼いだもので、時と處の如何を問はずこの種のいかなる迫害にも無關心ではありえな

51

といつて、勞農ロシアの政策を彈劾したが、併し「それはこの際別問題である。一國を外交的に承認することは國內の信仰や政策を基礎とするものではない」と、對露政策の不變を述べてゐた。

かうして國の外と中から、マルキシズムの名によつて、かれが惱まされる程度は、最右翼から受けるそれに劣らない。マルクスの價値を認めれば認めるほど、その文字の末に膠着する人々に對する輕蔑と嫌惡は増して行つた。

「マルクスを外國のソヴェート・ロシアへやれるものか」  
も一度そう吐き出すやうにいつて、かれは話しを續けた。

### 3 尤もらしい宰相姿

この日、わたし達はマクドナルドをチエツカースの首相別邸に訪問したのである。折しものロンドン海軍會議で、身體が幾つあつても足りない忙がしい中を、かれは進んでわれ等少數人を招待した。

「この近くを御案内しませう、高いところからこの一帯がよく見えますから」  
暫らく應接間で午後のお茶を呑んで話してゐると、かれはかういひながら無造作に立ちあがつて、自分で階子段の上にある押入れから、烏打帽子とステツキを取出して庭に出た。  
「寒いから貴方がたは外套をお着になつたがいゝでせう」



外套を着たものかどうかを思ひ煩つてゐる客を顧みて、かれはつけ足した。主人を真中にして少数の一團は、庭続きの小山の方に進んだ。英國特有の底冷えのする風が、冬樹立を通して吹いてゐた。

私はこの日ほど、ラムゼー・マクドナルドのほんとの姿を見たことはなかつた。ロンドンに来て二ヶ月経つと、もうマクドナルドはわれ等に珍らしい姿ではなかつた。議會でも、レセプションでも、ロンドン海軍會議でも、群衆の眼が集つてゐる先を見れば、屹度そこにかれを見出すといつてもよかつた。濛いモーニングか、燕尾服かど、どの保守黨内閣の首相も及ばないほどかれを品のいゝ尤もらしい宰相姿にしてゐた。

その四角四面のマクドナルドに見馴れる私には、今日のくだけ方が氣に入つた。水色……で昔はあつたであらうほどの古い野外服に、底厚の運動靴がいかにもかれに似つて見えた。大足に歩くかれのガツシリした姿には、日本流に算へて今年六十五歳といふやうな老の影は毫しもさしてゐなかつた。

先ほど、令嬢のイシユベルが、かれの書齋——歴代の英國の首相が週末毎に据つたであらう書齋を見せてくれたが、デスクの傍に大きな斧があつた。「これは何です」と聞くと「父が薪を割つ

てゐたのが、他にお客様があつたので、こゝに置き忘れたのでせう」といつてゐたが、かれがそうしたこと親しむのは、たゞに運動のためだけであらうか。

私はかれの後に従いて、その矍鑠たる姿を見ながら、英國で有した最初の労働黨首相の奇しい過去を考へてゐた。

かれがスコットランドの北端ロシマウスといふ寒村に生れたのは、ここで繰り返すのには餘りに知れた事實である。「私の生れた場所？　ロシマウスと發言するんです、ロシといふ小さい川の口といふところから名づけたものです」と、その後茶の時に話してゐたが、その小さい川の食堂にも寢室にも二つしか室のない百姓家が、かれの生れた家である。

かれは物心のつく頃から、もう漁船にのつて、家の生計を助けた。十二才の時には學校をやめて、農園に薯を掘つた。十八才の時に二三圓を握つたまゝでロンドンに来て、それから、かれの苦闘の幕は開かれて行つた。

「どうしても仕事が出来なければ乗合自動車の車掌にならうと思つたが、いよく最後といふ時に、自動車協會の宛名書きの仕事が見つかつたんです。自分の過去を誇りがほに話したことのないかれも、いつか話しの序でにそらいつて笑つたことがある。

それからかれはクーバー・ボックスといふ会社の倉庫に雇はれ一週間六圓二十五銭を貰ふ仕事にありついた。その頃である、お晝を食ふ金がなくて、ギルド・ホール図書室に晝の時間を過ごし、水を呑んで本を讀んでゐたのは。

昭和五年の二月廿三日、ロンドン會議が開かれた翌々日、ロンドン市長は各國全權を主賓としてこの同じホールで盛大な歓迎晩餐會を開いた。マクドナルドが這入つて來ると、満場は破れるやうな大喝采をした。かれは五十年前の過去を想出したかどうか、一杯詰つてゐる圖書棚を感慨深そうに眺めた光景を私は忘れないでをる。

#### 4 小山に立つて説明す

マクドナルドが、どれだけスコットランドの生れ故郷に執着を持つてゐるかは、この安息所で、かれと手を握つたその時から分つた。

かれの傍にはいつでも令嬢のイシユベルと、令息のマルコムがゐた。妻君に死なれて獨身を守り通してゐるかれの家庭をまかなつてゐるのは、令嬢のイシユベルである。總理大臣としての晩餐會も、夜會も、アット・ホームも、その招待の主は、悉くかれとイシユベルの名が連ねられて

ある。このイシユベル嬢に、海軍會議の首相祕書官に任命されて居るマルコム君が手傳つて、主婦のない淋しい家庭の「對外」陣立は出來てゐる。

この二人は無論ロンドンに生れた人々である。だのに父の希望からか、それとも自己の趣向からか、二人ながらあのスコットランド特有の縞格子の袴をはいて、本當のスコッチのやうに振るまつた。近頃はロンドンの若い女で、煙草を吸はないものなどは少ないのに、イシユベル嬢は煙草も吸はなければ、顔にお白粉氣は微塵もない。髪を後に無造作に束ねた頭の上に、スツポリ赤い帽子を被つて、われ等の後に從つた。

「こゝは大變いゝ。こゝに週末に來ると、氣も、心もすつかり變つて、何ともいへぬいゝ氣持になります」

マクドナルドはそういひながら、田舎を讚美した。このチエツカースといふのは、ロンドンから三十哩ばかり北にある英國首相の週末休養場で、リー卿といふ華族が自分の別荘に建てたのを、そのまゝ——これに維持費をつけて國家に寄附したものであるのである。

わたし達は暫らくして小山の頂上に達した。霧の深いこの地方としては珍らしく晴れて、廣く開いたバツキングダムシャー一面を俯瞰することが出來た。

「あれがミルトンの失樂園を書いた場處です。そら、あそこに森が見えませう、あの樹林の中から米國に渡つたメイフラワー號の船材をとつたといひます。」

かれは持つてゐるステツキで指さしながら一つ／＼に説明してくれた。冷たい風が激しく麓から吹いて來た。見ると外套を着ないのは首相一人だけである。

「あの小山の先の塔は南阿戰爭に死んだ人の記念碑です。それからあの方面が、スコツトのアイバンホーが活躍した舞臺です」

庭自慢が、自分の庭を説くやうな誇りが、かれの口調にあつた。

歸りの道には馬の蹄の跡が、青草の上に幾つも残つてそこが丸く切れてゐた。

「これはひどい、實に亂暴だ、なんとしたことだ」

かれは同じやうな言葉を澤山並べて、恐らくは獵に來て荒したであらう馬足の跡を恨めしそうに見た。そして何回も何回も靴で、その切れ目を踏んで直そうとした。

「これだけの草になるのに、どれだけの年月と丹誠がかゝると思ふ」

かれは獨り言のやうにそういひながら、芝を踏んでまはつた。

私は思はず、マクドナルドの一面に打ち當つたやうな氣がした。英國の有名な記者であるネヴ

イソンは、この前の選舉の時にかれの遊説に同行したが、「かれの魂は自然の美醜によつて踊るやうである」といつた。

「わたしはかれほど自然に敏感である人を知らない。かれの魂は自然の美によつて踊り、自然の醜によつて沈むのだ。田舎の景色に富んでゐるところに行くと、かれは戰闘的になり、じめ／＼したところに行くとき氣の毒なほど憂鬱になる」

かれは一個の詩人である。「マクドナルドを政治界に送つたことにより、英國は天才的な文學者を失つた」とある人はいつたが、かれの著作と演説に、豊沃な文才を見る時に、その言葉が決して誇言でないことを知るであらう。

淋しい家庭生活にあつて、かれの唯一の伴侶は自然である。

「そうですネ、私に自由な道を選べといふならば、一日に四時間讀書して、三時間書くことが地上の樂園でせうネ。自由に書籍が讀めて、それから胸中に湧く諸種の感想を書き現はす時間さへあれば、私は別に他に望むことはありません」

とかれは語つたが、併しこれに加へる唯一の條件は自然の美にあることは勿論である。

5 國家主義を憤る

應接間に歸つて來てのわれ等の話しは、更にいろ／＼な問題にわたつた。

『世界大戰後、國家主義の勃興はどうだ』

かれはクリスチヤナ市がオスロといふ名にかはり、チエツコスロバツクなどの町が、いづれも自國流に改名したといふ話しを聞いて、そう嘆息していつた。

『それは無理はないでせう』

誰かといふと、かれは直ぐ聞き咎めて

『自己を主張するのはいゝ、併し自己の獨立を主張するのに、他人を蹴付していゝといふ思想が當然でせうか』

言葉に力を入れて駁撃した。

『自己主張といへば、あなたの御演説の中の It is I といふ字句が問題になつてゐるではありませんか』

私はそういつて聞いてみた。ロンドン會議の開會式當日におけるマクドナルドの演説はその文

章において、その内容において、堂々たるものであつたが、その最も重要な文字が英文法からいつて間違つてゐるといふので、英文學者の間から批難が起つた。かれは軍備縮少が各國民に深い關心を有する事實であることを述べた後で

『英國の道は海の上にある。それは小さい島だからである。その國民の種族は海から來た、その防禦と公道は海である、その國旗は海の旗である。われ等の海軍はわれ等にとつて飾り物ではない、それはわれ等自身である。』

その It is I が、文法といふものは言葉自身よりも大切であると思つてゐる英文學者に引つかゝつた。それは It is we か、It is we ourselves か、それとも It is of us かでなければならぬ。『一國の總理大臣が、こんな文法上の謬りをしては教育上からいつてもよくない』といふ批難があつた。教科書に活字一つ間違つても、國體が潰れてしまふやうに騒ぐ愛國者は、どこかの國の專賣ではない。

『そう、問題になつてゐるやうですね、あれは無論文法上からいへば私の間違ひです。それを發見して鬼の首でもとつたやうに喜んでゐるんです。併し It is we ourselves で強い感じが出ますか。』

そういつてかれは問題を一笑に附した。

それからわれ等の話題は、も一度社會主義に歸つた。

「レニンとは同じ會に出た筈ですが覚えてるませんか。かれが出たロンドンの會に私も出て居つたのですが、つい気がつきませんでした。かれが非常な闘士だと聞いたのは、それから餘程後だつたのです。トロツキー？ トロツキーとは逢ひません。かれは多く米國に居つたんではありませんか？」

かれは私に反問した。私はトロツキーがアメリカに居つたことは事實だが、その後ロンドンに来て居つたことが、かれの自著の中に書いてあることを手短かにいつた。

「米國といへば、私が餘程前に米國に行つた時に、ド・レオンといふ社會主義者がニューヨークにゐました。私は雑誌でこの人を知つてゐたので、その事務所を訪問したことがある。事務所といつても汚ない室で、かれは紙の中に埋れながら、居眠りをしてゐた。起して自分が誰であるかを自から紹介すると「そうか、君が誰であらうと、おれには一向面白くないよ」といふんです。非社交的な人だと聞いてゐたが、これには少し驚きましたね。「それは知つてゐます。私があなたの雑誌に何が正しい社會主義であるかを書くことが出来たら興味が出ませう」とい

つてやりました」

かれの駁撃力は、その青年時からの特長であつた。

## 6 宗教家の調子あるかれ

「今度の軍縮會議は東京で開いたらどうですか」

かれの注意が、とかく會議から去らないのを見て、私はそういつた。

「東京？」

東京といふと、列席の人達は「東京はいゝな、東京を見たいな」といひあつた。令息のマルコム君はニコ／＼笑つてゐた。かれは昨年の秋に京都で開かれた太平洋會議に出席して、クリスマス前に歸つて来たばかりのホヤ／＼の日本通である。マクドナルド一家が、個人的には如何にも日本人に好意を見せて、何くれとなく世話をしてくれるのは、日本で受けた歡待の返禮の意味でもある。

「東京といふと遠すぎるからな」

と誰か口を出すと、マクドナルド氏は

「その頃までには飛行機が通じて、もつと早く行けるやうになるよ」と注意して、その實現に興味のあることを示した。それからかれは近頃の科學の發達が、驚くべき速度で進んでゐることをいつた。

「その發達の内で、最も驚くべきものはラチオであらう。去年の秋、私はアメリカへ行つたでせう、その時にラチオをやつたのですが、それを私の生れ故郷のスコットランドで聞いてゐるた知人があります。私が放送室に這入つてイシユベルに「こちらへ行くのか」と、何氣なしに小さい聲でいふと、それがスコットランドへ聞えたのです。」

かれがフーヴァの客として紐育に上陸した時の模様も、自動車の音から、歓迎の辭まで、ロンドンに居つて手にとるやうに聞えたといふのである。

「かうなると國民全體が自分達もその關係者の一人だといふ氣になります。つまり歓迎されたり、歓迎したりするものはたゞマクドナルドとか、フーヴァとかいふものでなくて、自身もその當事者だといふ感じを持つやうになります。それがどれだけ國際間の利益になりませうか……時に若槻さんのラチオは日本にどういふ成績でしたか」

マクドナルド氏は若槻氏が北極を經由して放送したことを想出して私を顧みていつた。

「よく聞えたつて？ それはよかつた。そうして國と國とが直接に話しあふやうになれば、世界はもう少し變つて來るでせう」

かれは豫期して居つたことであるけれども軍縮會議を開いてみて國と國との疑ひがどれほど深いものであるかを、今更ながら驚いた。かれがセント・ジエーム宮に婦人代表の訪問を受けて、軍縮事業の困難を述べた話しには、神に祈るやうな調子があつた。

「たゞ今、佛國の代表ホーズレー夫人は、わたし達の大問題は、平和を安全と一致させることだといはれました。まことにそうです。この安全といふものはその内容において九割までは精神的です。もしわれ等が世界の人々に對して、かれ等は安全だと信じさせることが出來れば、邪惡な政治家がどう騒いでも軍備を増すために、國費を支出させることは出來ないでせう。恐れと不安心といふこの目に見えない綱が常に後から引張つて私達を前進させないのです。私はスチムソンさんと(同氏の方に顔を向けて)その國民を信用するか、かれ等はまた私達を信用するか。私はまた若槻さんを信用するか(若槻氏の方にむいて)、若槻さんは私を信用するか……この疑問が私達の心からぬけるまでは、私達はいつまで臆病な動搖を續けてゐるのです、少なくとも軍備の大きさについては。」

私はかつてウイルソンの演説を聞いて、それが世の不信を憂える宗教家の説教のやうな調子のあることを感じたことがある。マクドナルドのそれは祈りといった方がいゝほど人の尙覺めざるを憂えて、事理を説き、理想を追ふて諄々として社會と人類に訴へる響きがある。かれは南阿戦争の時に、非戦論を高調して動かかなかつた。世界大戦の時に總ゆる迫害を排して、毅然として戦争反對を貫きつづいた。これがためかれはベルヂウムで軍隊に監禁されたこともあるし、戦後二回の選挙といふもの無慘に敗戦して、かれの同情者すらも、かれが再び政界に出る機會はないであらうことを想つたほどである。

『世界よ、なぜ覺めないのだ』

かれの話しを聞いてみると、かういつて揺ぶつてゐるやうな感じがある。今回の軍縮會議の協定の束縛期間を一九三六年までとして、各國の賛同を買つたのも、この間にせめて、ラヂオその他の仲介機關により人間が少し賢くなつて、國際間の疑心暗鬼が取去られることを期待してゐるからであらう。

## 7 淋しい家庭生活

女中や召使ひを周圍にをかぬマクドナルドは、なにかといふと直ぐ令嬢のイシユベルを呼んだ。

『イシユベル、あのクロンウエルのライフ・マスクの抽出しを開けてくれんか』

チエツカースはクロンウエルに關する蒐集で有名である。その歴史的な手紙もあれば、一族の肖像もある。他に見出しえない生像もあつて、それは奥深い抽出しの中に藏されて居り、その鍵をイシユベル嬢があづかつて虎の子のやうに大事にしてゐるのだ。

『今日は外ならぬお客様だから、財産全部お見せしませう』

かれは笑ひながら、そういつて令嬢に開けさせたりした。

マクドナルドといふ名が話の種になつた時である。ある英國の紳士が『自分の家内の祖母がイシユベル・マクドナルドといひますが、その家ではメクドナルドと發音してゐます』といふと、かれは娘の方にむかつて『もうお前はお祖母さんになつたのか、馬鹿に早いではないか』といつて、われ等を笑はした。

子供に對するかれの溶けるやうな愛情は、その空氣を和げた。子供達はまたなにかと父親に氣をつかつた。

「なぜマックは結婚しないだらうね」

と私はその後、ある英國人の消息通に聞いたことがある。

「あれで中々婦人にはもて、申し込まれた人も二人三人あるのを僕は知つてゐる。だがかれは結婚しないんだ。かれの半生の情的歴史は死んだ妻と共に閉ぢて、また開かれることはないんだらう」

そういつて、かれはマック君が、どれだけ前の妻を愛してゐたかを語つた。

一九一一年の八月に英國に鐵道の大ストライキがあつた。その時に、丁度かれの妻は大病であつたが、かれは労働黨の院内總務として妻の病床に侍つてゐるわけに行かなかつた。かれは心を残して街頭に出て争議の調停に當らねばならなかつた。

暑い日で、妻のマーガレットは氷を欲しがつた。が、その氷はストライキのためにどこにもなかつた。かれに代つて病床に居つたかれの友人は、ロンドン中捜して、漸く氷の一片をえて、それを病人に與へたといふ話である。

「自分が代表する人々の罷業のために、その愛妻に氷一つ與ふことが出来ず、ロンドン中をさがしたといふのだ。正にこれ一個の悲劇ではないか」

そういつてこの英人は溜息をついた。

かの女は五人の子供を残して死んだ。マクドナルドはかの女の死の床に座して、その靈魂に捧ぐる一書の著作に精進した。

「かの女は、もしかの女が再び生れることができるならば、同じ道を生きることが出来るやうに希願すると、われ等にいつた。かの女はまたかの女が努力し、助けて來た主義と人をわれ等に委托した。九月八日、太陽が西に傾いて落日の榮光に照り榮ふる時、病室が夕陽の悲しい光に満つる時、かの女は逝つた」

かれは妻の名に捧げた一書において、妻の死を悲しんでそう書いて居る。

妻の影像をその遺兒に見出して、かれは一切第二の家庭を拒絶した。生後三四ヶ月の赤兒を末に五人の子供を、かれは男の手で育てた。今マルコム君は代議士であり、二十五六歳にしかならぬイシユベル嬢がロンドンの市會議員であることに、かれは何にも代へられぬ喜びを感じてゐる。

「もう歸らなければならぬのですか」

汽車の時間が迫つたので、われ等は立ちあがると、かれはマルコム君イシユベル嬢と共に出口



のところまで送つてくれた。親子三人は夕暗の中に一列に立つた。

私は自動車の中から、この睦まじい、併しながら淋しい一家を今一度見た。マクドナルドは、あの華やかな舞臺に踊りながら依然として淋しい姿である。私のかれの演説と、話しの中に英國人の誰もが持つてゐるユーモアと氣軽さが無いことを想出してゐた。生一本の眞摯さと詩人に近いまでの純情が生活的には一生の間、一人の戀人しか持ちえず、思想的には社會主義のパンナIをかゝけて、しかもそれ以上のイデオロギーに走る餘地なからしめたのではないか。

民主的でありながら專制的であり、冷靜でありながら熱情的であり、論理的でありながら詩人的であり、戰闘的でありながら調和的である。それがかれの矛盾した姿である。そして、この矛盾を蔽ふてかれの抗し難いバーソナリチーがある。

この純情人を、その宰相に持ちえた英國人は不幸であらうか。私は夕暗の汽車の窓から、葉の落ち切つた森の去來を眺めながら家庭妻の「かれ」を頭に置いてゐた。

## 第二 ムツソリニ會見記

### 1 駄々広い部屋にたゞ一人

部屋の戸が制服のいかめしい番人の手によつて開かれると、私は四百疊敷きもあらうかと思はれる室に出た。

遙か先方の隅の方に机があつて、その後には人の影が動く。

その人の影は私の這入つたのを知ると、立つて私の方に進んで來た。

「ムツソリニだ！」

私はハツと思つた。私は今まで有名人名人にあつた経験から、かういふ場合には、もう一度秘書にあつて來意を告げ、それから目指す御大將に逢へるものとばかり思つてゐた。それに目のギロリとした、物すごいムツソリニを想像して來た私には、先程、机を離れた人が、少し下向きの、洋服屋の番頭以上にはふめない骨柄であつたので、ムツソリニの秘書だと思つてゐたのだ。

「よく來られました。いつローマにお着きになりましたか」  
 這入る私と、進んで來たかれとは、部屋の真中で逢ふと、かれは私の手を握りながら、さう挨拶した。「なんの言葉を話すか」と聞きもせず、かれは直ぐ英語で話しかけた。佛語に堪能なかれが、日本人とみると黙つて英語で話すほど、かれは日本人と英語とを結びつけてゐるのだ。  
 「十日ばかり前にローマに來ました。實は初めは二三日だけ留まるつもりでしたが、閣下にお逢ひしたい計りに留つたのです」  
 私は滅多に使つたことのない「閣下」(ユアー・エキセレンシー)といつたが、この場合尻のこそばい氣もしなかつた。  
 一週間ばかり前に、外務省に行つて書記官に逢つた時に、私が「ムツソリニ氏にお逢ひしたいのですが……」と申し入れると、かれは、私の言葉を繰り返して「首相ムツソリニに謁見を御希望なのですか」といつた。私は皇帝が皇族でなければ、普通用ひないこの言葉が、ムツソリニ氏との會見に使はれるのを見て「成程」と思つた。  
 その時から私は、ムツソリニ氏には「閣下」でゆくことに決めてゐた。  
 「有難う」

かれはさういひながら机の前の一つの椅子を私に與へ、その一つに自分がかけた。

「どこもさうですが、特に日本では閣下が非常に人氣であります、新聞記者として、ローマに來ながら閣下にお目にかゝらずして、通りすぎるこの出來ないことを感じて、迷惑を願つたのです」

私がさういふと、かれはも一度「有難う」といつて、ニツコリした。

下ぶくれのした顔でガツシリしたところは寫眞のまゝだが、相對してゐると寫眞に出てゐる姿味は殆んどない。紺の上衣に、縞のズボンを着てキチンとした身姿は、黒シャツ黨の黨首とは思へぬ立派な紳士姿だが、前の折れたシングル・カラーのネクタイが横に外れてゐるのが、私の目を引いた。

## 2 かれの成功觀

「どうぞ直ぐ質問に入る事を許して下さい。閣下のこの驚くべき成功の秘訣はどこにあるのですか」

「ローマは初めてか」とか「市内はもう見ましたか」と、さすがに人馴れて、質問を續けるムツ

ソリニ氏に私は簡単に答へた後でかういつた。

云ひ馴れない「閣下」といつて少しも不自然を感じなかつたやうに「この驚くべき成功」と當人の前でいつて、私は自ら何の不安も感じなかつた。

かれの權勢が絶大であるといふばかりでは當らない。民衆の間には「かれがなくなつたら」といふ懸念がある。時の權力者を讃めることについては、大きく割引する必要があり、その外に賢明に生くる道がないのであるが、「ムツソリニが居らなかつたら」といふ憂ひはかれに心よくないものすらも思つてゐるやうである。

その前の晩に私は日本料理屋に行つた。そこに、一人ムツソリニに會見したい日本人が居つて、身許を調べたり愚圖々々してゐることに不平をいつた。するとこれを聞いてゐたその料理屋の親父が、

「ムツソリニをさう慮めないで下さいよ。誰にでも逢つて、その健康をいためられたら、ローマは又ゴタ／＼になつて、わたし達の商賣が出来なくなりますよ」と懸命に辯解した。

ムツソリニ一人の力で秩序が維持されて居るのはお世辭なくて事實である。

謬つた赤色政策に懲りたローマ市民は、經驗からかう信じてゐるらしい。

「わたしの成功の秘訣？」

かれは私の質問を繰り返していつた。

「成功でも何でもありません。たゞ働くこと、規律だけです」(Work and discipline)

失禮ながら點數をとればかれの答は満點である。かれはほんとにさう信じてゐるのか「成功でもなんでもなし」といつたその答に少しも不自然な誇張はなかつた。

### 3 イタリーだけの主義

かれの「成功」について一應質問をして、儀禮上の義務が終つた以上は、私自身の質問をしてもう一答である。

この頃になると、私はもう少しも遠慮を感じなくなつてゐた。大きな部屋には私とムツソリニ氏だけである。昔、たしかスペインの大使館であつたとかいはれるこの建物は、外は貧弱であるが、中は流石に立派である。この廣間は、華やかな、レセプションか、ダンス・ホールにでも使つたものであらう、床はモザイクに敷きつめて、周囲の天鵞絨のやうな布で張つた壁の正面には

織繪が下げられてゐる。

『もし私に敵意でもあつて、急に懐からビストルを出して狙撃したらどうするだらう』

私はヒヨツとそんなことを想像して、自から嘲つて打ち消した。併しもし從來何回もかれを狙撃した一味の敵が、兇器を持つてこゝまで来れば、ムツソリニの生命はかれのものである。隣室に秘書は居らうけれども、それを呼ぶにはベルを押す必要があり、こゝまで来るには相當な夕イムを要しよう。

それと同時に、殺意あるほどの敵が、かれとこゝに来て二人で相對することが、どんなに至難であるかも直ぐ感ぜられた。軍縮會議のイタリ全權の紹介状と、吉澤代理大使の盡力で、私は幸ひにかれと會見は出来たけれども、これは必ずしも誰にでも許される特權ではなかつた。私は自分のホテルで書いて行つた二三の質問を出した。

『あなたの主義なりイイズムなりは他の國に適用できますか、たとへば日本に？』

かれはその質問を見ていつた。

『私は英語が不自由なので、かういふ質問に答へるのは六かしい。一體どのくらゐローマに止まられます』

かれの英語の力が充分でないことは、二言三言話すと分つてゐた。なんでも一年半ぐらゐ以前から始めたのださうだが、『目下勉強中だが、歳とつてからの語學は駄目です』と笑つた。

『お目にかゝれた以上は、明日の朝、早く立ちたいと思ひます、場合によれば、もう少し滞在して』

といふと『さうですか。そんなに早く』といつて、それでも不十分な英語で答へようとした。

『私の主義はイタリだけに適應するもので佛國にあてはまるものではありません』

さういつて、かれはギロツとした目を私の方にむけた。

私はこのギロツとした眼を見て、初めてムツソリニを見たやうな氣がした。エツチ・ジー・ウエルスが、『あの泥棒のやうな目を見ろ』といつた目である。ムツソリニだけに見られる目である。

#### 4 背が低く愛想がい

ギロリと、あの圓い、飛び出た眼を回轉したのを見て、私は初めて、も一つのムツソリニに打ち當つたやうな氣がした。

かれが下目に伏せて居る時は、前にのべたやうに、かれは洋服屋の番頭さん以上に踏めないほどの柔和な相である。下ぶくれのした顔が多少意志の強さうなところを現はしてゐるが、それも愛嬌に隠れて現はれない。

それにかれの偉大な體格を想像してゐた私は、かれと一緒に歩いて、私と同じぐらゐの——イタリー人として寧ろ極めて背の低いのに驚いた。もう頭が大分禿げかゝつて、前頭の毛が薄いのもかれの人柄を獯猛には見せなかつた。

が、質問が眞面目になつて、かれがグルリと眼球を動かした時に、あの寫眞にある、またムツソリニを表象する性格が飛び出して來た。この二つの性格が恐らくは、Duceとして——リーダーとして、長くその位置を保たせて居るのではないか。

『私の主義はイタリーだけのもので、他の國に適應はできません』

私はムツソリニからこの言葉が出たのを寧ろ不思議に聞いた。が、この言葉を聞いて私はかれを尊敬する氣になつた。

廿五六歳までに社會主義を信じない奴は低能だ、それ以上になつてもなほそんなことに執着してゐる奴は馬鹿だ——かれは確かそんな意味のことをいつた筈だ。一體、國民性の違つた人間に、

一本道で押へる定規といふものがあるだらうか。

少なくとも私はイタリーの土地を踏んで、イタリーに何故ムツソリニが生れて、それが微動だもしないかの理由が讀めた。生れる理由のないもの、乃至は存在する理由のないものは存在しない。さういふ鐵則を諒解するものは、フアツシズムの存在理由についても、もう少し謙遜であるべき筈であつた。私はイタリーに入つて始めてさう考へたのであつた。

私はイタリーに行つて二つの大きな特長を見た。一つはかれ等が、アングロ・サクソンのやうに、自から治めることを知る國民でないといふ事實であつた。

ローマ時代からの立派な歴史を有するこの國の、最も大きな産業は外國の觀光客が落す金である。かれ等はある意味でいへば、先祖を食つてゐる國民であるともいへる。一年を通じて外國人が行く數は莫大なものであつて、ドイツなどには『ローマを見なければ死ぬな』といふ言葉もあるといふ。

イタリー人はこの容易な金を目掛けて墮落した。汽車の車掌でも、食堂の給仕でも、案内人でも、かれ等は外國人を欺すことだけを考へてゐる。一流のホテルに行つても、餘程氣をつけないければ、その釣銭は必らず足りないがちである。これを發見されて文句をいはれても、かれ等は

鰻が水をかけられたやうな平氣な顔をしてゐる。

かういふ國民であるから、これを治めるためには、上から強い制裁と規則を押しつける必要があるであらうことは、當然である。自から治めることの出来ないものは、制裁を以て押へるの外はない。だからイタリアに行つて古蹟を見ると、

『わたしは公許の案内人だから』

といつて鑑札を見せて安心させる者が、山のやうに寄つて来る。それでも誤魔化すのだから手がつけれぬ。

併しムツソリニの治下になつて、この規則の勵行が嚴格になり、比較的よくなつたことは何人もいふところである。この國民に制裁のない自由を與へて見る——

### 5 金草鞋をはく聖徒

今一つのイタリアの特長は——短い私の旅行の経験では——この國民が驚くべく信仰心の強いことである。

イタリアには無數のお寺がある。なにしろ羅馬法王のお膝下だけに、石を投げれば必らずお寺

と坊様にあたるほど、教會堂が多い。この教會堂には無論キリストやマリアや聖徒の像があるが、不思議なことには、これ等の像は、みんな金の草鞋をはいてゐる。

金の草鞋をはいてゐるからといつて、なにも落し物でも拾ひに出かける裝束ではない。善男善女が代りくくに来て、キツスをするので、その足が磨り減つて、かつたる坊の足のやうになつてしまふ。雨だれ、石を穿つといふが、イタリアの固い大理石は、柔かい唇で見るとかげもなく減つてしまふのである。金の草鞋はその豫防策である。

ムツソリニの政策を見る時に、われ等はその背景として、かうした國民があることを見るを要する。これをどう治めるかと、實際政治家に與へられた問題だ。

水の流れは低きにむかつて掘らねばならぬ。國家の政治は國民の傳統と性格と趣味に従つてとるを易しとする。ファツシズムはイタリアの國民性に咲いた花だ。その花が悪花であるか、善花であるかは蒔いた種と、苗土の質の吟味を必要とする。

『私の主義と政策はイタリアだけに適するものなのだ』

かれが力強く云ひ放つた言葉が、私のなほ耳の底に残つてゐる。私がムツソリニの主義に反對することは、今もなほ昔と少しも變りはない。強大な國家主義と壓迫政策は、私は斷じて同じえ

ざるものである。

が、「イタリア國民の性格からいつて、これでなければ秩序と統一が保つて行けないのだ——少なくともそれがイタリアには最もいいことなのだ」といつたら、外國人たるわれ等は何かいへるだらうか。

自國の國民性を深く掘つて、服従性と迷信(信仰心)に根ざした政策をとつて、宗教尊敬だの、秩序維持だのとひた押しに押しに行くところは、かれまた決して凡でない。

## 6 人間か組織か

十分以内で切りあげる筈であつた私の會見時間は、もう十五分間もすぎた。ムツソリニは自からつぎの私の質問に移つた。

「假定的な質問を許して下さい。あなたが職を辭する場合に、あなたを襲ぐものは何ものですか。人間ですか、組織ですか」

今はムツソリニ一人が押へて居る。それで治まつて行つてゐる。が、人間政治の弱さはその當人があなくなれば、雨崩のやうに壊れ落つることである。それをかれはどう考へてゐるか——。

わたしにとつては、かれのこれに對する答へは明らかであつた。かつて七省の大臣を兼攝してゐたかれは、今これを漸次他にゆづつて、自からは内閣の首班としてのみ實權を握つてゐる。

「あなたはお偉いから、お一人で押へつけてゐなされる、が……」

私が質問の意味を説明しようとする、ムツソリニは慌たどしく手をふつた。

「分つてゐます、分つてゐます」

この質問がかれの氣にいつたか、ニコリして笑つていつた。

「無論、組織です……オルガニゼーションです」

私の短いイタリア滞在でさへ、かれがいかにかこれに意を用ひてゐるかど分つた。その前の日に丁度ファシスト團の施政十一年の記念祭を行つたが、各商店や、電車は悉く國旗を掲げた。喇叭が鳴るので外に出てみると、子供や大人の黒シャツ黨員が列をつくつて、後から後からと街を練つて歩いてゐた。

ローマとその附近に、黒シャツを着た可愛げな兒童が、いかに多いか。

世界の潮流に反して、強烈な自國第一主義を、兒童に教育して、これが結局どういふ影響をもたらすか。そこに果して大きな悲劇は起らないか。それはまた別個の問題である。かれが人間中

心主義でなくて、組織の力で押して行かうとすることだけは明らかである——かれ自身がるなくなつても、依然その政黨が生存を續けようとするやうに。

私の質問はまだ盡きないけれども、當日の第一回の面會者である私の後には、まだ待つてゐる者が多いに違ひなかつた。

私が立つて握手をしようとする、「お送りします」と、私と一緒に立つて入口の方に歩いて来た。

「お宿はホテル・ローヤルでしたね、またお使ひを差しあげます……あ、あなたのお名前は何でしたつけね」

途中まで来てかれは考へ出したやうに、かう聞いた。そして、も一度机のところに歸つて私の名前を書いた。

一緒に歩きながら私はいつた。

「二三日以前に私はボンベイに行つた時、案内人に「シグノア・ムツソリニをどう思ふ」と聞いたのです。記者として私は實は貴方の評判を誰にでも聞くのです。するとその案内人が「かれは半分神様で、半分人間だ」といふのです……」

私がかういつたのはお世辭ではなかつた。これは實際實驗したことであつた。

「かれはいゝが、かれの周囲のものがいかん」

これがかれに對する最悪な評判であつた。これがある人に話すと、

「どうせ、さういふはなきやならんさ。ムツソリニを攻撃して見ろ、大變なことになるから」

と笑つた。無論、それは私の考へてゐることであつた。

私が、かれにボンベイの案内人の言葉をとりつくと、「有難う」

といつて、微笑した。かれの位置になると毎日お世辭で食傷してゐるであらう。小さいお世

辭で喜んだり悲しんだりするのはお世辭に餘りめぐりあはない人である。併しかれの治下の名も

ない者が、さういつたといふことに、かれは満足したやうであつた。

その翌朝、早く私はローマをたつて、四五日してパリにつくと、日本大使館にローマの大使館

からムツソリニ自身の寫眞と秘書のフェラツチ氏の手紙が廻送されてゐた。

手紙はイタリア語で書いてあつた。かれの秘書からの手紙が、いつでもイタリア語で書いてあ

るところに、かれのイタリア第一主義が見られた。

「内閣首相自署の寫眞を送ります。御質問に對しては、も一度お逢ひすることを希望して居られ



ます」

とあつた。こんなことなら三四日を犠牲にしてもローマに滞留するのであつた。

「あなたの政策に對する批難は壓迫政策にある。これは過渡期の政策ですか、それ自身が主義の中心をなすものでですか」

「過去約十年の行政的御經驗で、將來、最も力を入れられることは何ですか」

さういふ私の質問はつい聞く機会を失なつた。——が、パリの夜の町を見るにつけても私娼一人出くわさないローマの町の夜が私の頭に甦つた。

労働と規律と——ムツソリニは何故、も一つをこれに加へて國民に教へないか。正直と……。

### 第三 フーヴァの顔

大統領フーヴァ氏に關する電報を見ることに私は白聖館でみたあの青白い顔を想起してゐる。

英國でマクドナルドに逢ひ、ローマでムツソリニと語り、またロンドン會議で佛國首相タルヂユの顔を見て來た私が、ワシントンに來てフーヴァに逢はないのは諸國巡禮が善光寺を見落すほどの事件であると感じてゐた。しかしいよく華府に行くといふことは簡単でないことが解つた。

「個人的にフーヴァと會見することは困難でせう。近ごろは誰にも逢ひませんよ」

大使館の人もさういへば、米人の記者もさういつた。最も都合の悪いことには出淵大使が丁度沿岸に行つてゐなかつた。

「でも日本の雑誌などに誰かフーヴァと逢つて、大いに移民問題などを論じたといふ記事が出てゐたそうですぜ」

「雑誌の口繪か案山子にでもむかつて獨り演説をしたのではないですかね、それにしても大統領が移民問題を、日本人を對手にして論ずるにいたつては、會見獨り演説も少し識者を無視し

てゐるネ」

そこで私はフーヴァは顔を見るだけで満足することにした。一週間に二回づゝ定期的に會見する新聞記者の群に交つて、白聖館の大統領事務室に行つた。

「顔色が青白いな……」

私は部屋の中央に立つてゐる大統領フーヴァの顔を見て、なによりも先きにそう感じた。それと同時にフーヴァを寫眞でみると飯のしやもちを反對に突きさしたやうに偏平な顔の持主で、餘程讓歩しても色男組にはいらぬ。いつか死んだ後藤新平子が、

「フーヴァといふ男は風彩から見れば下男のやうな顔をしてゐるが、頭はとても確かりしてゐるぞ」

と私に話してゐるが、併しかうして目のあたり見ると愛嬌のあるいゝ顔である。

かれは新聞記者團の這入つて來るのを見ると、直ぐかぬて用意してあつたステートメントを聲低く話し始めた。

「ロンドン海軍條約が、もし普通議會で通らなければ特別議會を召集する」

そつういふ意味のことをいつた。

「ザツツ・オール・フオアツデー」

かれはかういつて七分の恥かし味と、三分の愛嬌を交ぜた顔をした。質問も起らなければ、無駄話しも無論ない。新聞記者達はブツ／＼いひながら室を出た。

大統領ハーディングが、華府會議のころ新聞記者の質問に對してとん珍かんのことを云つて以來、新聞記者は直接に大統領に質問をすることを許されぬ。聞きたい問題を紙に書いて、豫め秘書の手許に送り、大統領はその内から氣にむくだけの問題をとつて返事するのである。この日がそうであつた。

序でだから書いておくが、米國や英國は民衆國だから新聞記者などは傍若無人なほど自由だらうと思ふものがあるかも知れないが、それは全然反對だ。日本でこそ夜の夜中、大臣私邸を襲つたり電話をかけたりにして、新聞記者の近づき得ない場合はないが、英米などは絶対にそんなことはない。議會でも記者禁斷の廊下や室があつて、議員を呼ぶのに一々係りを通じてゐた。

「フーヴァ大統領は何故あゝ不人氣になつたらう」

私は室の模様を見ながら考へてゐた。朝から晩まで顔色が青くなるまで働き、かつその誠實を疑ふものがないのに、しかもかれは何故昔日の人氣がないのか。

「大統領は何しろ働くんだからねネ」  
白聖館に詰めてゐるある米人記者が私に話した。

「朝はどうしても八時からだ、それからグットお晝まで働いて、中食はせいぐ一時間、退けになるのは午後六時すぎだ、餘り訪問客に逢はないのも、タイムが惜しいからだらう」

「歴代の大統領はみんなそんなに働くものなのか」

「昔のことは知らんがネ、クーリツチなどは働かなかつたよ、午前中は働くが午後は大概晝寝かなにかしてゐたものだ」

「そういへば、大統領には大分疲勞の風があるぜ」

今まで黙つてゐた南米ヴェノスアイレスの日曜紙の編輯長が口を出した。

「大統領が南米を訪問したのは、まだ一ケ年も経過してゐない。その頃ぼくが南米で逢つた時には元氣が盛んだつたものだ、それなのに今日、逢つてみると如何にも疲勞の影がさしてゐる」

「始終大統領の顔を見てゐるとさうも思はないが……今日も、もう八時間近くも働いてゐるからその日の疲れではないかネ」

聞いて見ると大統領は毎日機械のやうに動いてゐる。私の行つた時は丁度海軍檢閲のあつた頃

だつたが、従來の大統領はかういふ場合には一日ぐらゐ早く行つて、ゆつくり見て來るのが常だが、フーヴァ氏は最後に間にあふ汽車で行つて、最初の汽車で歸つてしまふといふやり方だ。

「これほど働く大統領がなぜ不人氣なのか」

私はもう一度よく考へてみた。そう考へると、私の顔には自分で勝手に偶像を礎いて、その偶像が自分の想像した通りでなかつたので、みんな寄つて集つてこれを壊しつゝある無責任な大衆の姿が現はれた。

大統領就任前のフーヴァほど、大へんな人氣の人はなかつた。民主黨と共和黨はこの人を取りあつた。いよゝ／＼かれが當選したといふ報が傳はると、株式は天井知らずに吹き出した。アメリカの繁榮はかれの手によつて安全である。さう誰もかれも信じた。かれはアメリカの偶像となり切つた。

併し恥かしがり屋のフーヴァは、自分でかつて偶像にならんとしたことはない。かれは自分の實力の承認をすらすら、大衆に要求したことはない。

偶像は誰が礎いたか、民衆自身である。民衆は今自分の礎いたものを破壊してゐるのだ。世界の歴史が何回も経験したやうに。

これを一方からいへば、政治家自身が宣傳した果實を自分が刈りとつて居るともいへる。かれ等は一國の繁榮は政治家のさち加減でどうでもなるやうにいつて來た。そして米國繁榮の功績を自分だけで獨占して來た。

だから繁榮の一路を辿る時に政權に座した政府と政黨人はいつでも人氣があり好評である。白聖館の前の銅像のやうに黙りくさつて、その上に寝てばかりゐるたクリーツチは、その評判において三十幾代の大統領の内に多くその類を見ない。

そこに米國經濟界の反動が來た。經濟界は太平洋で、大統領は船長である。船長が荒れ狂ふ海をどうにもなるものではない。問題はその荒濤に處して、どうするかの手腕にすぎない。

だのに民衆は太平洋の荒波を船長の無手腕な結果にしてゐる。しかもかれ等はその船長の手腕を偶像視したのだから、自から失望し罵倒するのは當然である。

民衆を味方から失なつたフーヴァは、政治家をも併せて失なつた。元來かれは政黨人ではない、かれは一個の技術家(エンヂニア)であつて、政黨機關(ポリチカル・マシン)の外にある。政黨が不承々々にかれを押ししたのは民衆の人氣がかれに集中したからだ。

今、その民衆がかれに背いた。政治人が「敵」をとるのはこの時である。フーヴァは今、嵐に

直面しながら船員に背かれた頼りない船長の位置にゐる。

しかしかれの不人氣は現在のまゝに持ちつとけるのであらうか、私はそう思はない。

かれが政治家でないこと、従つて人情の機微を捕え得ないこと、また彼れが一個の機械人であつて、まづ自から圖だけはひかなければ承知しないこと、そうした缺點——一方には特徴があることを私は認める。

しかし始めに偶像化したことが間違ひであつたやうに、現在この偶像を破壊することも極端な反動にすぎない。偶像を捨て去つた後にかれの評價は定まるであらう。

これを書きながら私は働き疲れのしたフーヴァの青い顔を想出してゐる。

## 第四 ハースト(ジャーナリズムの怪人)

### 1 一人の力、戦争を供給す

天才か、悪疫か。人道の選手か、悪魔の代表か。新聞王ハーストの評價はまだ本國のアメリカですらも決定してをらない。併したど一つ明らかかなことは、ある批評家がいつたやうに、かれこそは驚くべき『アメリカの現象』である一事だ——。

かれといふ人間が、人生の大道を地道に行つたことのない男なのだから、この物語りも、かれが殆んど一人の力で、アメリカとスペインとの戦争を起したあたりから始めようか。

第一に讀者、第二に讀者、第三に讀者、讀者に代るものなし——かれは新聞に對して、かうした信念をいだいてゐるだけに多數の讀者をうることに對しては、どんな犠牲でも惜しまなかつた。そして『讀者』といふものは、何がなんでも、煽動的な、頭がスツキリするやうな、馬鹿々々しい威勢のいゝ記事を欲するものであることをかれは知つてゐた。

「キュバをスペインから獨立させてやらうぢやないか」

かれは切かに腹心のものに語つた。當時キュバはスペインの領土で、その壓制に苦しんで居るといふ報道がよくアメリカにも傳はつた。かれはこれを利用して忘れたなかつた。

かれは特派員や漫畫家、寫眞班を後から後からと送つた。餘り悪口ばかり書くので同島のスペイン總督は、その數名の退去を命じたりした。

ハーストはある日、レミントンといふ有力な畫家を呼んだ。「君は社の方針を知つてゐると思ふが、キュバ島に行つてスペインの虐政振りを書いて送つてくれんか」畫家はその日にニューヨークをたつた。

暫らくして一通の電報が、その畫家からニューヨーク・ジャーナル社のハーストにあてて來た。

「當地は何もかも静かです。別に事件はありません。戦争もあるとは思へません。歸國していか」

ハーストは直ぐ折返し電報を打つた。

「そこに止まつてゐて下さい。君は繪を供給してくれ、私は戦争を供給しよう」

繪を供給せよ、さうしたら戦争を供給するから——何といふ大膽な言葉だ。かうした電報を打つたことについては、後日、ハーストは自らこれを否定したとのことだが、併しかれが米西戦争を供給した事實は、何人もこれを疑ふものはない。

## 2 キュバ獨立の少女志士

「一寸、チェンバーレン君に來るやうにいつてくれ」

社長のハーストは給仕にさういつた。物事を考へる時に、かれは軽い口笛をふくのが癖だが、その時に矢張り口笛を吹いてゐた。

「何か御用で……」

直ぐ大兵の紳士が社長室に來た。ジャーナルの編輯長である。

「たうとうスペインをやつつけてやつたよ。これを見てくれ」

ハーストは何時にもなく興奮してゐた。長く一緒に居るけれども、ハーストが興奮するやうなことは滅多になかつた。目の前で泰山が崩れても、氷のやうな冷やかさでそれを傳へることのできるほど、かれは生れつきの新聞人であつた。

出したのは一片の電報の切抜きであつた。それにはかうあつた——  
 『十七歳の少しい少女シスネロは今回アフリカ海岸に送られ幽閉されることになつた。かの女は  
 玫瑰共和国大統領の親類に當るものだが、キューバ獨立の運動に携はつたために二十年の刑罰に  
 附せられたのだ』

ハーストの新聞感に電光のやうな刺戟を與へたのはこの簡單な記事であつた。今までかれは毎  
 日、スペインの壓制とキューバの獨立を煽つて來た。各州の知事に手紙を送つて、『キューバ獨立に賛  
 成するかどうか。米西戦争になつたやうな場合には何人の義勇兵を供給できるか』といった質問  
 をなし、その答へを新聞にのせた。またキューバ獨立の志士とその家族の寫眞などは、毎日その第  
 一ページを飾つて來た。

『この事件について總ゆる記事を集めてくれ給へ。それから請願書を作つてこの婦人を解放して  
 くれるやうにスペインの女王様に願出るので。それには先づ米國の全婦人に訴へなければな  
 らん。まづ有名な婦人に署名させて、それから全米の婦人を動かしてくれ給へ。それを電報で  
 スペインの女王に送るのだ。わが社の全部の通信員に訓電して、スペインの壓制の事實を書か  
 せろ。この事件は幾百の演説や論説よりも有效だよ』

立つてゐる編輯長を前において、ハーストは立てつゞけに命令した。

『無論、スペインの大使はわが社の通信員を迫害するだらうがネ。併しアメリカの婦人が一齊に  
 起つ時に、そんな迫害がなんだ！ とに角、この少女を救はなくてはならん。力を以て監獄か  
 ら奪ひ出してもいいし、それが出来なかつたらアフリカに行く途中を擁して船をとめて助け出  
 してもいい』

ハーストが云ひ出したら最後、金などが幾らかゝつても構はないことをこの編輯長は知つてゐ  
 た。

『よろしうございます。やつつけます』

編輯長は頭を下げて部屋を出た。出がしに二人は顔を見合せて大きく笑つた。

請願書の署名は直ぐ始まつた。その中には大統領マツキンレーの母親もあれば、ジェファソン・  
 デビスの未亡人もゐた。一八九七年八月廿三日までに、米國婦人の何萬人かこの署名に加はつ  
 た。ジャーナル紙は毎日二ページづつを割いて、この少女の解放運動やその署名者の名を報じ  
 た。

『全國は今や少女救済に起つ』かう書いた大きな活字が、毎日の標題脇を賑はした。スペイン側

では大使を始め、對抗宣傳を開始したが、それは太平洋の荒波をバケツで喰ひとめるやうなばかりな努力であつた。

少女救済のために全米の血は熱した。

### 3 監獄を破つて少女を救ふ

「君に重大な任務をお願ひしたいと思ふんだが」

熱病のやうにこの問題が擴がつてゐる眞最中に、ハーストは新聞社中の腕利きカール・デツカ

ーを呼んで命じた。

「何とかしてこの婦人——シスネロ嬢を牢獄から救ひ出してくれんか。金などは幾らかゝつても構はんから」

デツカーは冒險的で、機敏で、火の中にも飛び込む意氣のある記者として有名であつた。社長

の命を受けて、かれは一團の人間を率ゐて玖馬國のハバナに行つた。何事も極めて秘密に。

あるアメリカ人が、少女の囚はれてゐるロコジタ牢獄の前にある家屋を借り入れたのはこの事

があつて暫らく後のことであつた。この家に若い、屈強な米人が、澤山出遣入りするので、多少

不思議に思つたものもあつたが、驟然たる島内の物情に氣をとられてゐたスペインの官憲が、元

より氣づくわけはなかつた。大西洋の温たかい海風が、煙草の葉を縫ふて吹いて來る暗い夜、何

人も人の影はこの家を中心にした。

デツカーがハーストの命を受けてニューヨークから姿を消してから約一ヶ月の後、ニューヨ

ク・ジャーナルの日曜版(一八九七年十月十日)は、その第一面に驚くべき事件を發表して全米

人士の神経に叩きつけた。

「わが紙、シスネロ嬢を救ふ」といふ大きな標題で、その小標題には「長い間、外交家が努力し

て出来なかつたことを、一新聞が一擧にして敢行す」とある。アメリカ人は眼をすひつけられる

やうな興味でこれを見た。それには一人の勇敢な記者が牢獄を破つて、この少女志士を救ひ出し

た事、そしてその志士は今や米國の星條旗の保護によつて、ニューヨークに向ひつゝあることを

血の出るやうな筆つきで書いてあるのだ。

私はその時の光景を私の筆を用ひずに、デツカーが變名を用ひて書いた記事から翻譯してみよ

う。

「エヴァンゼリナ・シスネロはつひに自由になつた。わが社は現代において新聞がなし得た一大



事件としてこれを讀者に傳ふることを光榮とする。それは新しい新聞道の方法を示すものであり、またロコジタ牢獄に過去十五ヶ月の長い間幽閉され、總ゆる苦難をなめた憐れな少女について知つて居る總べての婦人の裏書きをうるものであらう……私はロコジタ牢獄の鐵窓を破り、美しき囚人を解放した……スペイン官憲はこの少女の眞個の性格について女王に隠すことは出来た。併しかれ等はわが社の決心に對して、これを遮るほどの固い牢獄を造ることは出来なかつた……計畫はハバナの眞中で行はれた……家の屋根に鐵砲を備へ、そこから少女が逃げたといふ事實が如何に決死的な企てであつたかを知ることが出来よう」

かうして少女を救ひ出して後、かれ等はこの婦人に男の着物をきせた。そして男子に假裝させて、折しもハバナに碇泊してゐる米國汽船にのせた。

この少女がキューバの前大統領の姪にあつて居り、またこの事件が全米に廣告された後であつたから、如何にこの記事が米國人の血を煽つたか分る。ハーストには好意を有つてゐなかつた大統領マツキンレーと、その閣員すらもハーストの行動を賞讃せざるを得なかつた。

この少女志士がニューヨークに到着した時の光景！ マチソン・スコエアは十萬人の人間で埋まつた。軍樂隊、行列、煙花——戦争熱は火のやうに燃えた。

#### 4 米西戦争つひに爆發す

これをきつかけにハーストの開戦煽動は一段猛烈さを加へた。スペインの駐米公使ロームが、國許の新聞主筆に私信を送つて、米國において戦争熱が盛んになつて來たことを書き、その中に「マツキンレーその他の低級なる政治家が」といふ文字があつたといふので、これを紙上にかゝげて「これ米國に對する最大なる侮辱なり」と煽動した。對手が黙つてゐると「かれはわが社の記事を沈黙によつて承認した」と曇みかけた。

が、さうした毎日の事實を紹介してゐたのでは、どれだけベーチがあつても足りはしない。果然、事件は急廻轉した。

その頃、ハバナ港に米國の軍艦メイン號が碇泊してゐたが、何かの原因からこの軍艦が破裂して、乗組員二百五十名が爆死した。

今まで開戦説を主張してきたハーストがこれを利用しないわけはない。かれは直ちに鉛筆をとつて原稿を書き下した。

「メイン號の爆發者を發見したものに對して五萬ドルの現金賞を呈す。右懸賞金はウエルス・フ

アゴ會社に供託しあり、何人と雖も確かなる證據を提出したる者に贈呈す」  
この事は直ちに全世界に發表した。

ハーストは併しこの爆發の下手人を不明なりとするのではなかつた。かれは始めからこれをスペイン人の所業なりとした。かれはそれがスペインの敷設水雷で、しかも陸上から電氣を通じたものだといつた。スペインを「敵」とよんで、その敵に疑ひがかゝるやうな記事ならなんでもせた。

かういふ記事が人心を煽動しないわけはなかつた。ニューヨークのある酒屋で、ある紳士が皆なを見廻して、杯をあげながら、

「諸君、メーンを記憶せよ」

といつたことから、この標語が米國に嵐のやうに傳はつた。おかげにハーストの目がける新聞の購讀者数は激増して、メーン爆破事件があつた三日目には、實に三百萬の部數を突破した。

ほんとの事、嘘事を突きまぜて毎日煽動した結果は、つひに米國はスペインに對して開戦を宣した。開戦の障害になるものはなんでも——大統領マツキンレーに始めて誰をでも攻撃したかれだから、これがどれだけ満足だつたか知れない。かれは普通の費用以外に暫らくの間に百萬圓を

つかつた。

戦争が開かれると、かれは直ちにワシントンに行つて、大統領に謁見を申込んだ。

「私は國のために戦争に出たく存じます。どうでせう、私に義勇兵を組織して出征することをお許し下さいませんか」

大統領は丁寧なこれを断つた。

「それでは私は快走船を所有して居りますが、國家のために無代で提供したいと存じますが」

マツキンレー大統領もこれを断る口實はなかつた。

ハーストは自分で直ちに船を一艘借りきつた。これに敏腕な記者や寫眞班を乗りこませ、自らこれを監督した。かれは戦争の真中に出て彈丸雨下の中に觀戰して、それを報道した。

##### 5 「スエズで商船を沈めよ」

ハーストの借切つた船の前を軍艦が通りすぎた。

「どこに行くんだ」

メガホンで大聲に聞いた。

「敵の軍人を捕虜にしたけれども、船の荷厄介になつて困るから、陸のところまで放して來るんだ」

ハーストは自分の船の乗組員を顧みていつた。「あの軍人達を虜どれ」

ハーストは自分で大きなピストルを下げて岸邊に下り、銃先を突つけて、濡鼠のやうになつた二十六名の軍人を自分の船に押しあげた。そしてかれ等を跪まづかせ、米國の國旗に接吻させた。……これ等の光景を、寫眞や活動寫眞にとらしたのは無論である。

「われ等、敵兵を虜つたり」

暫らく後で、かれは米國艦隊の旗艦にかういふ信號をした。そして各艦整列して居る中を堂々と進行して司令長官シュレーの前に出で、捕虜を引渡した。並るる水兵達は狂氣のやうに喝采した。ハーストは得意さうに頭を下げた。この光景は無論詳しくかれの新聞を通して全米に傳へられた。

かうして新聞記事を作つてゐる間にも、かれはこの戦争の生みの親だけあつて、責任を感じたらしい。これから少し以前のことである。スペインのキヤマラ提督はその軍艦をひきゐて太平洋に出發したといふ電報があつた。そしてそれにはかう附記してあつた。

「もしキヤマラ將軍が、米國のデュイー將軍よりも早くヒリツピン島について、米國軍艦を待ち受けて居れば、デュイー將軍の米國艦隊は全滅の外はない」

當時、ヒリツピン島はスペイン領であつたが、この島が兩國のいづれに確守されるかによつて太平洋方面の勝敗は決定されるといつてよかつた。ハーストは直ちにロンドンの特派員クリールマンに手紙を送つた。

「もしスペインの軍艦がマニラに向つたことが確實なら、君は早速英國の船を買へ、そしてそれをスエズ運河の真中で沈めてしまへ」

考へても見給へ、スエズ運河は國際航路であつて、この通航を妨害することは由々敷い國際法違反である。しかも一個の米國市民ハーストは、自分の責任においてこれを敢行しようといふのだ。

たゞ幸か不幸か、同艦隊は途中まで來たがスペイン海岸が不安となつたので故國に引き返し、ハーストの大膽な行爲は實現する機會がなかつた。

米國は米西戦争に勝つた。勝つたのは米國ばかりではない、ハーストのジャーナル紙の讀者は大河が決するやうな勢ひで増して行つた。毎日百五十萬部を印刷してそれでも間にあはなかつた。

今までかれの商敵はワールドであつたが、もうそれは敵ではなくなつてゐた。

## 6 怪傑の生ひ立ち

ハーストの新聞的鬼才——いゝ意味でも悪い意味でも、この新聞的鬼才はどこから生れたか。かれは米國の西部、日本人とは關係の深いカリフォルニア州のサンフランシスコに生れた。一八六三年といふから今年六十八歳である。かれの父はジョージ・ハーストといつて、競馬や花札が好きで、鑛山であつた大金持であつた。當時アメリカの西海岸には金山や銅山が発見されて、雪崩のやうに人波が殺到して來た。よく昔のアメリカの映畫の中に出るやうに、酒屋と暗黒街が幅を利かして、人氣は頗ぶる荒かつた。

この空氣の中で、この親を持つて生れたのであるから、かれの投機的な大膽さは生れつきだといつてもよかつた。それに親父はその後上院議員になつて、政治界でも有力者であつたので頭を下げて來る有象無象が山のやうにあつた。かれは「人」を懼れる所以を知らなかつた。

ハーストは郷里で中學校を終へて、一八八二年にはハーヴァド大學に入學した。その大學は米國一の立派なものであるが、併しそこでコツ／＼勉強するのはかれの柄ではなかつた。かれは役

者のきるやうな派出な着物を着、赤いネクタイをつけて、よく芝居の眞似をして友達を笑はしたりした。

ある朝、教授達が飯を食つてゐると、そこへ包物が届いた。

『その受取り書をいたゞいて來いといふことでございますが』

使ひの者が云つた。教授がそれを開いてみると、それは自分達の顔を漫畫にしたものであつた。中には赤めんをしたり、鼻をとがらしてゐるものもあつた。

『誰だ、こんな悪戯をするのは？』

調査は直ちに開始された。下手人は何時も餘り成績のよくないランドルフ・ハーストであることが発見された。かれは當時ハーヴァードの學生達が發行してゐた雑誌ランプーンの事務を擔任してゐた。國許の父から金が澤山送られて來るので、それで一味をつくつて首領を以つて自認してゐた。

『ハーストを退學處分に附す』

さういふ命令が出たのはそれから暫らく後のことであつた。

ハーヴァードを追はれたかれは、ニューヨークに行つて新聞のことを研究しだした。いろ／＼

の新聞がある中に、最もかれの注意を惹いたのはビュリツアーが社長としてやつてゐるワールドであつた。それは煽動と無責任の權化といつてもいゝほどの黄色紙であつた。併しそれだけに讀者も一番多かつた。

「これだ、これだ」

かれはワールドの束をいだいてサンフランシスコの家に歸つて來た。

「お父さん。ぼく仕事をやりたいんですが」

「結構だ、なにをするの、農業か？」

「いゝえ」

「鑛山をやるのか」

ハーストは頭をふつた。

「ぼくにサンフランシスコ・エキザミナーをやらして下さい」

父はその子供の希望に驚いた。かれは借金の抵當にエキザミナー紙を自分のものとしたけれども、それは金を食ふ機械のやうなものであつた。それを自分の子供がやらうといふのだ！

二十三歳と十ヶ月の青年は、かうしてエキザミナーを自分のものとした。

「おれの舞臺はニューヨークだぞ、おれの目がけるのはワールドだぞ」

奇才縦横のかれは、田舎の町の新聞を作りながら、東の方を向いてさう頑張つた。その頃、親父は死んだが、寛大なる母親は、この「浪費のウイリー」といはれたかれに七百五十萬ドルといふ遺産の半分をくれた。

かれはニューヨークに乗り出した。米國新聞界の鬼才といはれるビュリツアーとハーストの二人の面々相對して血の出るやうな競争の幕は切つて落された。

### 7 紐育に乗り出す

ハーストは新聞を背負つて生れて來たと思はれるほどの新聞人である。

晩婚のかれに長男が生れた時のことである。かれの手下の記者が用があつて、かれをその私宅に訪ねた。かれは泣く赤子をだいて、

「號外、號外、號外」

とあやしてゐたといふ。かれの頭には新聞以外の文字がないのだ。

かれは生れ故郷の桑港の新聞の土臺が出來あがると、その注意を檜舞臺であるニューヨークに

向けた。

『どうですか。この間のお話について決心が付きましたか。ハーストさんは歐洲から歸つたんですが』

かういつて話しかけたのはハーストの紐育特派員バルマーである。對手は朝刊ジャーナルの社長マクリンで、以前からの話しの繼續であることは、その調子で分つた。

『ハースト君が私の新聞に来て共同經營者になつたらどうだらう。三十六萬ドル出せば半分の權利をあげますよ』

『冗談いつちやいけませんよ。それちやもうよしませう。それにハーストといふ人は、他人と協同で仕事が出来るといふ性格ではありません』

ハーストの代表者は帽子をとつて立つた。

『まア、さう短兵急でなくともいゝぢやないか。それちや一體幾ら出せるんですか』

『あなたの切り出した半分——十八萬ドルで全部の財産をゆづるなら買はう。それでもうまい話しですぞ。三ヶ月たてば賣らうたつて賣れませんよ。ハーストさんはどうせどれかを買ふか新しく起すかするんですから』

對手は手を額のところを持つて行つて暫らく考へてゐたが、『よろしい。それちやそれで手打をしませう。明日ハースト君にあつて手續をすましてしまはう』

といつた。商賣の話が早いのは米國人の特長だが、十八萬ドルの取引を一分もかゝらないで決済したのは、寧ろ云ひ出した方が驚いた。

一時間ばかり後で、ハーストとその代表者は相對して話してゐた。ハーストの顔にはまだ少年の面影がとれないのも理り、かれは三十二歳の青年である。

『どうも少し高く買ひすぎたやうです。十萬ドルぐらゐで買へたでせうがネ』

『結構結構。これからだよ。これからウンとやるんだ』

かれは喜んで踊りまはつた。かれには嘗つて金の勘定はなかつた。

かれは直ちに桑港に電報を打つて、その幹部を呼びよせて仕事にとりかゝつた。

### 8 新聞界の巨人を目がけて

『人間といふものは競争して安いものが好きなものだよ』

かれは今度買ったジャーナル社の社長室に納まると、今までの二セントの新聞代を半分の一

セントにした。そして當時、米國第一の發行部數を誇つたワールドを假想敵國にして戦ひぬくつもりになつてゐた。新聞の型も、體裁も、ワールドと同じものにしていゝものを安く賣らうといふ策戦である。

駈け出しの豎子、何をかなさんと高をくゞつてゐたワールド社長のブリツアーも二セントを長く繼續してゐるわけにはゆかなかつた。暫らくして一セントに引き下げた。これを見たハーストは得意の笑を洩した。かれはワールドに勝つたことをポスターやピラで盛んに廣告した。

かれはその頃——この後もさうだが——全く金に絲目をつけなかつた。必要ならば七百五十萬ドルを皆な使ひつくすつもりでゐた。その方針でやつてかれの桑港エキザミナーは四十五萬ドルの損をした後で始めて收支償ふやうになつた。

ある日、商賣人が來て支配人のバルマーに逢つた。「御經濟のために……」といひ出すと「お金のことなんかこゝでは問題にはしないよ。どの押入れでも開けてみてくれ給へ、お金の焼けてる臭がするから」といつて對手を驚かしたことがある。

それからのかれらの濫費ぶりは、さすがに對手を顔色なからしめた。かれは腕のある記者だともれば、倍額の給料を出してかかへた。三ヶ月の間に二萬の發行部數から十五萬にした。ワールド

ドの開きは僅かに三萬五千部しかないまでになつた。

當時、ワールドの日曜紙を編輯してゐた記者がゐた。ゴツダードといつて、まだ二十歳を少し越したばかりの青年であつた。ハーストはこの記者に會食を申し込んだ。

「突然ですが、あなたとあなたの部下を皆お雇ひしたいがどうでせう」

ハーストは單刀直入に申し込んだ。

「面白いけれども……」若い記者は答へた。「實を申せばあなたの新聞は未知數で、まだどうなるか分りません。三ヶ月もやつて行けますか。不確實なところに行くのは嫌ですからね」

ハーストは笑つた。そして無雜作にポケットから敏苦茶になつた紙を取り出して前においた。みるとそれは三萬五千ドルの小切手である。

「御入り用ならこれを全部さしあげませう。私はニューヨークで相當長く踏みこたへるであらうことが御分りになりましたか」

話しは直ぐ纏つた。この編輯長は一黨をひきゐてハーストに來た。

新聞界の巨人の戦争はかうして正面衝突となつた。今までビュリツアーの所有する建物を借りてゐたハーストの事務所は總べて追ひ出された。

## 9 年俸二十五萬ドルの記者

敏腕なる記者ゴツダードが出た後に、ワールドにはまだ一人の記者的天才がゐた。アーサー・ブリスベーンといつて、二十三歳で夕刊サン編輯局長になつた青年である。かれは日曜ワールドを主宰して、勇ましくハーストと戦つてゐた。

かれは短評に妙を得てゐたが、それを新聞の第一面にのせたい希望を持つてゐた。が、ビュリツアーの主義として個人の意見をその紙上に發表することを許さなかつた。

丁度その頃、ビュリツアー社長が旅行に出かけた。夕刊ワールドを主宰してゐたかれは、この機会にかれの理想を實現してみたかつた。

「屹度評判がよくて読者が増えるだらうから、二三回やつてみたら社長が許してくれるにちがひない」かれは鬼のぬ間の洗濯にそれをのせた。

一週間はかりして社長の電報が歐洲から來た。「短評は直ちに中止せよ、もし書きたい意見があつたら朝刊に社説として書け」

かれは社長の命令には服従したけれども、満腔の不平をどうすることも出来なかつた。その晩

キヤフエー・マーチンに行つた。

「ヤ、君はブリスベーン君ぢやないか。君が私の社に來てくれるといふんだがネ。俸給は君の要るだけあげるよ」

突然聲をかけたのはハーストであつた。翌日、二人は會見した。

「ハーストさん。あなたの御厄介になりませう。併し私が金で動いたやうに今の社長に思はせたくありません」

「じやア幾らゐるんですか」

「丁度、現在とつてゐるだけ。一週間二百ドルで結構です。もしあなたが、もつとお出しになるといふのなら、どうですか、私が夕刊ジャーナルを増したとけ一千部について一ドルづつ下すつては」

ハーストは笑ひ出した。「それでは餘り少くないかね。それなら一千部について十五ドルづつ出させう」「いえ、一ドルづつで充分です」ハーストは直ちに手紙の形式で契約書を書いた。

この一千部について一ドルづつの契約が、一年ならざるに三萬ドルになり、四萬ドルになり、五萬ドルにならうとは。その後ハーストとブリスベーンはこの契約を改正して、一ケ年の俸給五



萬二千ドルとした。今やかれの給料は一年二十五萬ドル内外で、それ以外に諸種の収入がある。

かれの収入が一週間三千ドルであつた頃のことだ。ハーストは漫畫部の支配人とニューヨークの町を歩いてゐた。

『一週間に三千ドルといふのは大變な額ですネ』

とその支配人がいふと、ハーストは窓飾りから靜かに目を移して、

『もつとブリスベインのやうな男がゐるないかね。ぼくは一週間三千ドル以上出すよ』

といつた。この言葉に力をえて、この人(ケニスベルグ)もその後一週間三千ドル以上とるやうになつたといふ。

敏腕な編輯者を得て、ジャーナルは夏の日に寒暖計が上るやうに上つて行つた。

### 10 民主黨を助く

『諸君、わが紙は今回の大統領選挙に對していづれを助けたがいと思はれますか。共和黨のマツキンレーですか。民主黨のブライアンですか。腹藏のない意見をいつて下さい』

それは一八九六年のこと。秋の大統領選挙が數ヶ月後に迫つて、米國はおこりのやうな政治熱に冒されてゐた。

幹部記者はいづれも共和黨を助けねばならぬことを主張した。その政戦は金本位か、銀本位(といつても銀貨を自由に造るといふ政策)かの争ひであつただけに、資本家はあげて共和黨(マツキンレー)側を助けてゐた。

『民主黨を助けて御覽なさい、廣告などは少しもなくなつてしまひます。われ等にとつては自殺です』

編輯局長も營業局長も、聲を合せてさう云つた。かういふ會合には何でも思ひ切つていへせるのがハーストの政策だつた。

『諸君のいふことはよく分りました。が、ぼくは諸君と意見がちがふ。マクエイ君、明日ブライアン應援のいゝ社説を書いてくれ給へ。それから編輯長、それを目立つところに出してくれ給へ、左様なら』

かれは帽子を被つて出て行つた。

ジャーナル紙がブライアンを後援することが翌日の新聞によつて分ると、廣告はドシ／＼少

くなつた。暫らくの間に百萬ドルぐらゐも失くなつた。幹部はみんな気が氣でなかつた。併しハーストは少しも驚かなかつた。ニューヨークの新聞が悉く自由銀論のブライアンに反對したことが、かれには覗ひどころであつた。今やジャーナルは民主黨唯一の機關新聞として全國に知れ渡つて來た。それにかれにはその經濟論の六かしいことは分らなかつたけれども、その議論が一般大衆に受けることを知つた。果然、一部からは新聞の購讀が減つたけれども、他方から盛んに増えて來た。

『政治教育のため運動費を募集す。外部からの寄附に對し、本社は同じ額だけを提供す』  
さういつた廣告を出して四萬ドルを集めたりした。

かれの奇抜な、しかも猛烈な運動にも拘はらず、ブライアンは敗けた。併し對手との總投票數の相違は案外少なかつた。かれは新聞の名が廣告されたことを以て満足した。

かれはそれから總ゆる方法で新聞を賣ることにとめた。自らそれを新新聞道と稱した。マツキンレー大統領就任式の時には一列車を買ひ切り、ワシントンとニューヨーク間二百二十八マイルを二百四十九分で走つた。汽車の中で新聞を造つたから、五時間ぐらゐ後ではその光景が完全に讀者の手にあつた。前回に書いた米西戦争を惹起したのはこの暫らく後だつたのである。

## 11 大統領暗殺さる

『大統領マツキンレー兇漢のために狙撃されて生命危篤』

といふ號外が全米民のハートを爆彈のやうに驚かしたのは一九〇一年(明治卅四年)九月、まだ焦くやうな太陽が米大陸に暴威をふるつてゐた時のことである。

當時、大統領はバファローの大博覽會に臨んでゐたが、手を白いハンカチーフでつまんだ壯漢が現はれた。負傷をして縋帯をしてゐるのだらうと誰も氣に止めなかつたが、かれの姿が大統領に近づくともみるや、爆然としてピストルは鳴つた。

「アツ！」

といふ間もなく大統領の大きな身體は前にのめつた。彈丸は二發發射されて、その一つが胃の腑を貫徹したのである。下手人は直ちに囚はれたがツオルゴツツといふ無政府主義者であつた。

この不祥事があると米國の輿論は期せずしてハーストにむかつた。ハーストはその前から總ゆる煽動的文字を用ひて大統領マツキンレーを攻撃した。丁度、東京毎日新聞の記事が星亨を殺したといはれるやうに、マツキンレーを殺したものはハーストだといふことに相場が決つた。

『ハーストに制裁を加へよ、ハーストを排斥せよ』  
 さういふ聲が國の内外から起つた。その當時、米國を旅行したものは麥藁で造つた不思議な人形を、電柱や木に下げて、呪つてゐるた光景を見たであらう。それが國民の恨みの的となつたハーストである。

『人殺し、無政府主義、兇漢』

さういつた醜い文字はこの一人のために造られたと思はれるほど使はれた。副大統領から大統領になつたルーズベルトは、殆んど公然黄色紙の存在、ハーストの新聞を攻撃した。

自分の新聞がポイコットされるのを見ながら、かれは動かかなかつた。かれはその前の年に民主黨のブライアンの勸説によつて、一つの新聞をシカゴに造つて今は三つの大新聞の持主となつてゐた。ニューヨークの朝刊の名をニューヨーク・アメリカンと改めたのもその頃のことだ。

かれは民主黨のために盡したといふので民主黨クラブの會長に推選され、それから暫らくして下院議員候補者となり、當選して議員となつた。

その頃、かれはエジプトに旅行してナイル河を溯のぼつてゐた。かれはフト一つの新聞の記事が目についた。

『パナマ運河に關する英米の條約は、すでに英國政府の批准を経て、アメリカ上院に批准をうるばかりになつた。この條約によつて兩國は運河を武装しないことになつた』

ハーストの第六感は稲妻のやうにひらめいた。かれは直ちに士人に命じて七十マイルの道を電信局にかけつけさせた。そして封筒の裏に書いた電報を打たした。

その電報は翌夜、ニューヨークのかれの事務所に達した。『武装できないやうな運河ならぬ方がいゝ、全力をあげてその批准を妨害せよ』

それから一ケ年の間のこの問題に關する戦鬪は米國新聞界の偉觀であつた。一般民衆はハーストに共鳴したが、大統領や國務長官ジョン・ヘイはこれに反對した。ハースト新聞の攻撃が餘り猛烈なので國務長官のヘイは大統領に辭表を提出して『内閣全體に迷惑を及ぼす恐れがあるから』といひ出したが、大統領はこれを許さなかつた。

マツキンレーが刺客の手に倒れたのは、此頃のことであつた。後を襲つたルーズベルトは國務長官ヘイの肩を叩いていつた。

『私はほんとに君を愛するよ、そしてハーストを輕蔑するよ。併し、こん度の事件だけはハーストの立場が正しいと思ふよ』

ハーストの主張は二ヶ年の後貫徹した。

## 12 結婚から政治へ

「ハーストは一體、誰と結婚するんだらう」

新聞王といはれるほどになつても、獨身で居るかれを、かれの周囲は不思議に思つてゐた。

一九〇二年の秋のことであつた。ヘラルド・スコエア・劇場に「パリからの娘」の喜劇が人気を呼んでゐた。その一座の中にウイルソン姉妹として知られてゐた二人の娘がゐた。姉をミリセント、妹をアニタと呼んだ。二人の父はウイルソンといふ有名なダンサーであつた。

この芝居を見に行つたハーストは、その姉妹の美貌と華やかさに魅せられた。かれの姿は毎晩この劇場の特別席に見られた。その頃、モーニング・テレグラフといふ新聞が役者の人気投票を募集したが、この姉妹は一等になつた——その後押しは餘人ならぬ、ハーストであつた。

かうして國の内外からは悪魔のやうに、敵のやうに、また神様のやうに思はれてゐたハーストにも優しい戀が芽ぐんだ。かれの事務所と劇場の間には、花と贈物がしきりに往來した。二人はハーストが第四十回の誕生日をむかへる日に結婚した。歐洲は彼等のホネームンの旅を歓迎する

のに寛大であつた。

戀の遊戯を終つて、かれは直ちに政界にのりだした。その頃のアメリカは民論が漸く動いて、怒濤のやうな「街頭人の潮」とでもいふべきものが社會の底を流れてゐた。この流れをすばやく感ずることハーストの如きはなかつた。かれは如何なる權力にも反對することを躊躇しなかつたけれども、この民衆心理の流れだけは常に自分の味方にした。かれが時に社會主義者といはれ、赤化主義者といはれるのはこれが故である。

一九〇五年にハーストはニューヨーク市長の候補者に推選された。誰がかれを推選したといふよりも、かれの周囲の人達がかれを上げたといつた方がよかつた。かれは元來、恥かしがり屋で、演壇に立つことは考へてさへも慄へるほどの男であつたが、政治家になるには演説の必要があり、感じて、努力して雄辯家になつてゐた。

が、かれは政治家としてはどれにも失敗した。大統領候補者に野心があつたがなれなかつた。一九〇五年にはニューヨーク市長を争つて落ちた。一九〇六年にはニューヨーク州知事を争つたがヒューズをして名をなさしめた。併しこれ等は何人の後援を有したのでもない。

「米國にハースト黨存在す」

米人はかういつて敗けたハーストを見ながらも、その健闘ぶりに驚嘆したものである。喧嘩では、殆んどかつて敗けたことのないかれが前ニューヨーク知事アル・スミスだけには、ひどくやりつけられた事件を語らうか。

### 13 議員收賄を素破ぬく

「諸君。既成政黨が墮落したといふ、併し私は單に架空な想像で申しあげて居るのではありません。私には確たる證據があるのであります」

さういつて辯士は大きく手をふつた。壇上の人は誰あらう、新聞王ハーストその人である。かれは共和黨、民主黨の大政黨を對手にまはして、個人の力で大統領候補者を押したたのだ。一九〇八年のこと。

「蜘蛛の絲のやうに張りまはした新聞網で米國をかきまはすのに満足しないで、自分で大統領を出して、米國政界をも自由にしようといふのか」

米國民は今更、奔放つきるところのないハーストの活動力に驚いたり怒つたりした。かれの姿を見んがためにオハイオ州コロンバス市に來た市民は、字義なりに空前の數に達した。かれは

絶叫を續けた。

「私がこゝに來たのは雄辯術の眞似をして諸君を楽しませんがためではない。私は愛國者の一人として、かゝる政治を續續してゐればこの大共和國の前途が危機に瀕することを諸君に警告せんがためであります。諸君、諸君の目前の大政黨は資本家の笛に踊る憐れな傀儡ではないか。乞ふ、その動かない事實としてこゝにスタンダード石油會社の最高幹部から、上院議員にあてた手紙を読みませう。この手紙はこの大會社に關係ある一紳士から、私に與へられたものであります。その名前は會社の迫害を慮ばかつて發表するのを許して下さい……」

聽衆は油汗にじむ手を握つた。意表から意表に出るのがこの人の特長であることを誰も知つてゐた。

手紙はスタンダード石油會社のアーチボルドから、當時上院に勢力を張つてゐたフォラカー及びマーク・ハンナ等に與へたもので、自分の會社に不利な法律を改正することを條件として一萬五千ドル、一萬四千五百ドルと何度にも贈つたことに關する往復文書である。

「既成政黨 墮落。政治家の收賄」

この素破抜きは爆彈のやうに擴がつた。後から後から發表された秘密文書によつて、資本家關

はたゞに法律に對する干渉ばかりでなくて、官吏の任命にまで立入つてゐたことが明らかにされた。

上院では審査會を開いた。大統領ルーズベルトはハーストを招いて懇談した。當の議員達もその手紙が眞正なものであることを認めざるを得なかつた。

「が、あの信書がどうしてハーストの手に這入つたのか。かれのいふところの紳士といふのは誰なのか。……さうして、まだその外にどんな秘密書類がかれの手にあるのか」

誰もかれもかういつて不思議がった。後暗い行爲を持つ政治家は、おこりのやうにふるへて恐がつた。

#### 14 二萬ドルで買った材料

事件は四ヶ年前にさかのぼる。

金で呻るスタンダード會社の事務所に、給仕あがりの二人の青年がゐた。一人は黒人でウィックフィールド、他は白人でスタンブといつた。二人はよくニューヨークのカフェーを呑み歩いた。

「金がなくて困るな、なんかうまいことはないかネ」

二人はよく話しあつた。かれ等は遊んで歩いてゐる内に、ハーストの新聞の記者に會つた。そしてハースト新聞が、いゝ新聞記事の材料なら金を惜まずに買入れることを知つた。

「では重役の手紙を買つてくれますか」

話しは直ぐ纏つた。黒人のウィックフィールドの養父は長くスタンダード會社に働いて信用を得てゐただけに、かれも重役から目をかけられてゐた。かれは皆なが歸つてから一人で居残つて、その手紙を寫しとつた。重要な手紙は夜の内に寫眞にとつて、朝、何食はぬ顔でそれを前のところに置いた。

これ等の手紙を買つたのがハースト新聞である。これに支拂つた代價が二萬五百ドルだといはれる。

その手紙は何等利用されることなしに三ヶ年といふもの金庫に仕舞ひこんであつたのである。

この材料を供給した二人は他のことで解雇されたが、ハーストが「紳士」といつたのはこの給仕あがりだつたのだ。

かうした方法で材料を手に入れることはかれにとつては少しも珍らしくない。三年のばかり前

にハースト下にある幾つもの新聞は、一齊に驚くべき記事を掲載した。かれはメキシコ政府と日本政府は合衆國の存在を脅かす如き驚くべき陰謀を企てたといふのだ。

『メキシコ政府はこの陰謀を達成するために大蔵省より百二十一萬五千ドルを支出し、米國上院議員四名及び數名の新聞記者牧師等に賄賂を送つた』

ハーストの新聞はこの事實を立證するために、『メキシコ大統領カイエスその他の最高官吏の秘密書類』をのせるとして、毎日これを掲載したものだ。

國際的陰謀もこれぐらゐの大袈裟になると正に開闢以來の大仕掛だ。ことに收賄したといふ政治家はポラーに始めて清麗潔白でアメリカに知られた連中ではないか。米國上院は直ちに特別審査委員會を開いて調査に着手した。

調査の結果はそれが眞赤な詐物だと分つた。ハースト自身が選んだ専門家も、それが嘘だと断定した。最後まで眞物だと頑張つたハーストは新聞に一文を發表して、

『手跡の専門家が悉く右の書類が偽造だと證明するならば、われ等はこれ以上論争することはない。併しながら事件の發展から見てもその書類の中にある根本的事實は決して偽造ではなくて、米國民に深甚なる重要性を有するものである』

といふ意味のことを書いて平氣でゐた。あらゆる調査をしてそれが偽造だと分つて、尙『根本的事實』は疑へないとは何事だ。

ハーストはこの詐文書に二萬ドルを支拂つた。お蔭様で一時米墨兩國の關係は非常に危険に瀕した。米國政府はモルガン會社の重役モローを大使に送つて、兩國の關係を静めた。

### 15 日本と英國を攻撃す

世界大戰が始まつて泥の中をかきまはすやうに、各國が一生懸命になつてゐた。ハーストはこの戦争には始めからドイツ側に味方して、英國や日本を攻撃した。

『電報でございます』

自宅の大きな應接室で、かれが社の幹部と話をしてゐると、そこへ一通の電報が差し出された。一九一六年十月のこと、ドイツ軍は早くもベルヂウムを越えて潮のやうに佛國に迫つてゐた。

ハーストは黙つて電報を読み下した。と、見る／＼かれは眞赤になつて怒りにふるへ出した。何年一緒に居つても、ハーストが色に出してかう怒つたことを見ることがなかつた。

「なんですか」

恐る／＼口を切ると、ハーストはその電報を渡した。

ハーストは幾つもの新聞を経営してゐる外に、國際新聞通信を経営してその支局がロンドンにあつた。その通信はハーストの方針によつて絶えず排英的な宣傳をして來たが、英國政府も餘りな態度に怒つて『もし今後、同通信が英國政府が檢閲した通りに報道しないのならば、郵便及び電信を使用することを禁ずる』旨を通告したのだ。

『どうするおつもりですか』

とかれの部下が聞いた。

「糞を喰へといへ」

一個のハーストは改めて英國を對手に戦ひ出した。英國政府に續いて佛國政府も、カナダ政府も同通信の退去を命じたけれどもかれは屈しない。かれは英國の檢閲の内情を暴露して攻撃した。また英帝國內の反亂を煽動した。

當時の大統領はウイルソンであつたが、かれは大統領をも鋭く攻撃した。『ウイルソンはロンドン・タイムスばかり讀むさうだが、一體その政治を英國の立場からやるのか、米國の立場から

やるのか』

この飛ば散りを食つたのは日本である。ハーストは始めから日本及び日本人が嫌ひである。加州の排日運動は殆んどかれ一人が作つたものだといつてもいい。日本のことゝいふと、かれの新聞はわけもなく攻撃し、總ゆる侮辱を浴びせた。

この文の筆者は當時カリフォルニア州に居つたが、毎朝の新聞が滑稽なほどの無實の事を以て日本人を誣ふるので、心からの憤怒を感じたことを覚えてゐる。『もし一人のハーストを失きものにしたら……』日米の親交を庶ふものとして、朝、ベッドの中に寝轉びながら、それからそれへと怪奇な空想にふけたことすらあつた。今でもかれは日本に對して好意を示して居らぬ。

かれの全力をあげての反對の效もなく米國はドイツを敵として聯合國と共に戦ふことになつた。かれは『百パーセント・アメリカ主義』をかゝけて、なほドイツを助け、聯合國を暗に攻撃した。

クラブや愛國團體はハースト系新聞の購讀を斷つた。あるところでは群衆がハースト新聞を配達人の手から奪つてこれを焼き拂つた。

……が、ハーストは屈することを知らぬ男であつた。



## 16 アル・スミスとの確執

かれ自らは政治家として成功しなかつたけれども、政治家はことごとくかれを恐れ、かれの意を向へることをつとめた。

『今度は誰をニューヨークの市長にしたもんでせう』

ターマニー・ホールといふ紐育で有力な政治團體の幹部マーフィーがハーストのところへ聞きに来た。

『ハイランを立て給へ』

かれは簡単にいつた。ハイランといふ名などは誰も聞いたことがなかつた。日雇ひ人から車掌になつて、それから法律を獨學して辯護士になり、地方の判事だといふことが後で分つた。

それでもハースト系の新聞の後援によつて、かれは市長になつた。八ヶ年の市長在職中、かれの政策はハースト新聞の社説を一步も出なかつた。『實際の市長ハースト』さう誰もいつた。

その頃、政界で賣り出した男にニューヨーク州知事のアル・スミスがゐた。始めターマニーの親分マーフィーはスミスに引き合せて、ハーストの公有主義を裏書きすることにより

助けて貰ふことにした。かうしてスミスは知事になりえたのだ。

ところがスミス部下の任命がハーストの氣に入らないといふので攻撃し始めた。それには當時、かれが敵國ドイツを加勢するといふ不人氣であつたので、凱旋兵士の歓迎委員にして貰ひたかつたのを選に洩れたといふ不平もあつた。

丁度、一九一九年にニューヨークに配達される牛乳が悪いといふので、ハーストはこれに知事が干渉せよと云ひ出した。『物價の高低に干渉することは知事の權限でない』とそれに應じないのを見たハースト新聞は、スミスを手ひどく攻撃し出し、漫畫で『資本家の手先』とか『赤子の敵』とかを連日掲載したものである。

『こんな事をいはれて黙つてゐられるか。おれはハーストと喧嘩するんだ』

魚屋からなりあがつたスミスは喧嘩つ早い。かれはかうターマニーの親分達に宣告してハーストに戦闘状を突きつけた。

『カーネギー・ホールの大講堂に来て貰ひたい。貴下は私に如何なる質問をしてもいい。私は貴下に質問をする。かうして大衆の前で黒白を決しようではないか。聴衆席の椅子は貴下側に半分、私の方に半分とらう』

一九一九年十月廿九日の晩、大ホールは割れるやうな大入りで、ほんとに立錐の餘地もなかつた。

『あのハーストに喧嘩を吹つかけて将来を棒にふるのか』  
皆なさういつて危ぶんだ。ニューヨークは鼎の沸くやうな人気だつた。

### 17 アル・スミス頑張る

ハーストは討論會に來なかつた。討論會はスミスの一人演説になつた。

スミスはあの齒切れのいゝペランメイロ調でハーストを『暗に歩く悪疫』だ『國民の敵』だと疊みかけた。

『併し私に對する攻撃は必らずしも珍らしいことではありません。かれの新聞の歴史を御覽なさい。この自由の國、勇敢な國において、公職に選ばれた者で一人だにかれに汚辱されないものがありますか……もしハーストの新聞が學校で教科書に使はれるとしますか、何人も公職に選ばれてから信用されるに足るものがないといふことになります。何人も正しきことを行ふものなく、何人も尊敬するに足るものなしといふことになります。諸君、クリーヴランド大統領

以來、一人の公人がこの男の讒侮を逃れえたものはないのである』

聴衆からは嵐のやうな喝采が耳を聳した。全米の新聞はこの英雄に敬意を表した。

それから三年の歳月が流れた。クーマニーのマーフィーはハーストを上院議員に、スミスを再び知事に推さうとした。ハーストとしてはスミスの人気のおかげに、今まで得られなかつた公職を得られる見込みがあつて無論喜んで承諾した。

スミスは當時、リユマチスでホテルに寝てゐたが、何といつてもハーストと一緒に名を並べることは嫌だと頑張り通した。

『あのハーストがおれを攻撃した時、おれの母親は病氣で寝てゐたんだ。ハーストの新聞を見て泣いて「わたしの息子はそんなことをする子ではない、あれは子供を可愛がる性分だ、あの子がどうして毒の牛乳を赤子にやつたりするもんですか」と口惜しがつたもんだ。あんな下等な男とどうしておれと一緒に候補者に立てるんだい』

スミスは何といつてもきかなかつた。マーフィーは「スミスが頑張つて私共の手にはおへません」といふとハーストも候補者になることをあきらめた。

ハーストは先頃の大統領選挙にもアル・スミスを助けないうで、却つて共和黨のフーヴァーを助

けた。

### 18 新聞王雑誌王となる

ハーストは思ひ出したら最後、直ぐ實行する男である。

一九〇三年にかれはロンドンに遊んだことがある。かれは朝起きて例によつて澤山の新聞や雑誌を擴げてみてみると、その中に自動車の雑誌で「車」といふのが目についた。かれは直ぐニューヨークに電報を打つた。

「自動車に關する雑誌を發行することを決心した。カーといふ見本雑誌を郵送する」

これが現在有してゐる十二個の雑誌の始まりである。かれはその後一般雑誌コスモポリタンを買収し、家庭雑誌グッド・ハウスキーピングを買つた。

家庭雑誌ではかれは自分の雑誌にのる広告は絶対にいかさまものはないといふ方針をとつた。そのため役人であつたウイリー博士といふを雇つて研究所を造り、食物の広告をのせる前に一應そこで研究し、立派なものだといふ試験が終つてから掲載することにした。そしてその廣告中に信用出来ないものがあつたら、雑誌社で費用を全部辨償するといふ方法をとつた。今この雑誌は

一年二百萬ドルの純益がある。

かれは雑誌の編輯者に對しても、かつて給料の多寡を論じたことはない。出来る人なら幾らでも出した。コスモポリタン誌の編輯長ロングを雇入れる時には、その多額の給料が問題になつたほどである。四ヶ月過ぎてからハーストはロングを呼び、「相談があるんだが……」

さういひ乍ら始めの契約書を黙つて自ら割いて三割三分の俸給の値上げをした。それから暫らくして今度はカリフォルニアの自宅から紐育の事務所に電報を打つて来て「ロング君の俸給を二割五分あげてやつてくれ」といつてあげさせた。

かれはたゞ自我を通すのではない。かれは英國婦人の小説家から恩を受けたことがあつて、その小説をコスモポリタン誌にのせることを約束した。ところが出来あがつたのを編輯長ロングが見ると頗ぶる氣にはないものである。かれはこれを自分の雑誌にのせることを拒絶した。

「それぢや困る、私も恩になつたし、この小説家の誇りもきすつけるから、是非載せて貰ひたい」

ロングは直ちに辭表を投げつけた。

「貴下は社長として如何な権限でもあられます、私はそれを疑ひません。併し私自信の無いも

のをのせることが出来ません。どうぞ辭任させて下さい』

「お互ひの年で女のごことで争ふのはつまらんでもないか。それほど主張するなら載せないでもよろしい。たゞかの女の誇りを害さないやうにして丁寧な手紙を書いて下さい』

### 19 現時のナポレオン

天才か、悪疫か——

私はこの一篇の物語りを終いんとするに當つて、最初にかゝげた疑問を、も一度こゝに繰り返したいと思ふ。

かれは二十四歳の、まだにきびのとれない頃に新聞界に身を投じた。一個の放蕩兒として何人もかれの前途に望みを囁するものはなかつた。

かれは冒險にもニューヨークで新聞社を買つた。新聞界の猛者ブユリツアは笑つて『あの若い男も長くはあるまいよ、ニューヨークと桑港では少し違ふからネ』と豫言した。いかにもそれは當然 豫言といつてよかつた。前の持主は暫らくの間に百萬ドルを損した。

新聞につき込む金は底無しのドブだ。ハーストに父の遺産があらうとも、どれだけそれが長く續かうぞ。それにかれは無類の浪費者である。かれの一年の利益はその後、一千五百萬ドルといはれたが、これを何時でも使ひ果して、周圍から到底かれの經營も長く續かないであらう警告を受けて來たほどだ。

そのかれが今や六十八歳にして、新聞王として天下を横行してゐる。かれはアメリカに二十四の新聞を持つて居り、それは益々増加する一方だ。かれの刊行物は毎日一千萬人以上の人間の目にとまるであらう。また米國に六種の雑誌、英國に同じ數の雑誌を有し、更に通信社、映畫フィルム會社その他の機關八個を有して、世界數百の新聞雑誌に供給してゐる。

かれは帝王と強國を恐れないけれども、帝王と強國は偏へにかれの御機嫌を損じないことをつとめてゐる。かれの新聞王國の一年の収入は實に一億五千萬ドルを超える。

ナポレオンが歐洲を横行したやうにかれは世界を横行し、ナポレオンがその黄金時代に自分の部下を自由にしたやうに、かれは今なほ自由にしてゐる。人間の價値は棺を蔽ふて定まるといふが、果してかれの評價が定まるの日があるであらうか。